札幌市文化財調査報告書
XIX

1979

札幌市教育委員会

札幌市文化財調査報告書XIX

S255遺　跡

1979・3

札　幌　市　教　育　委　員　会

例　　言

1　本書は、札幌市白石区厚別町上野幌の丸紅株式会社宅地造成予定地内に所在するＳ255遺跡の発掘調査報告書である。
遺跡の地番は、876－14番地を中心としている。

2　発掘調査は、昭和53年５月14日より６月10日まで行われ、延べ日数21日間であった。

3　発掘調査は、丸紅株式会社から札幌市への委託業務として、札幌市教育委員会が発掘主体者となり、札幌市教育委員会文化財調査員羽賀憲二を担当者とし、同上野秀一の協力を得て現場の仕事を遂行した。

4　本書の編集・執筆には羽賀があたった。

5　発掘調査には、下記の人々が従事した。
朝日征行、右衛門佐時雄、内山久美子、西条美智枝。

6　整理作業には、下記の人々が従事した。
横地桂子（土器・石器実測）、西条美智枝（挿図トレース）、近野広子（拓本）。（以上順不同敬称略）

7　発掘調査、整理作業においては、下記の機関・人々より協力と助言を賜った。

札幌商科大学 札幌市文化財保護審議会委員	大　場　利　夫教授
札幌大学	木　村　英　明助教授
寿都町教育委員会	内　山　真　澄氏

8　石器類の石質の肉眼鑑定は、北海道開拓記念館赤松守雄氏に御願いした。

9　発掘期間中、整理、報告書出版に至るまで、「丸紅株式会社札幌支店」には種々の御協力を得た。

目　　次

第１章　発掘調査に至る経過……11

第２章　遺跡の位置と環境……15

第３章　発掘区の設定と遺跡の層序……19

第１節　発掘区の設定……19
第２節　遺跡の層序……19

第４章　遺構及び遺構出土の遺物……21

第１節　竪穴住居址……21
第２節　Ｔピット……45
第３節　ピット……48
第４節　石屑廃棄所……53

第５章　発掘区出土の遺物……55

第１節　土器……55
第２節　石器……58

第６章　まとめ……63

結語……66

挿図目次

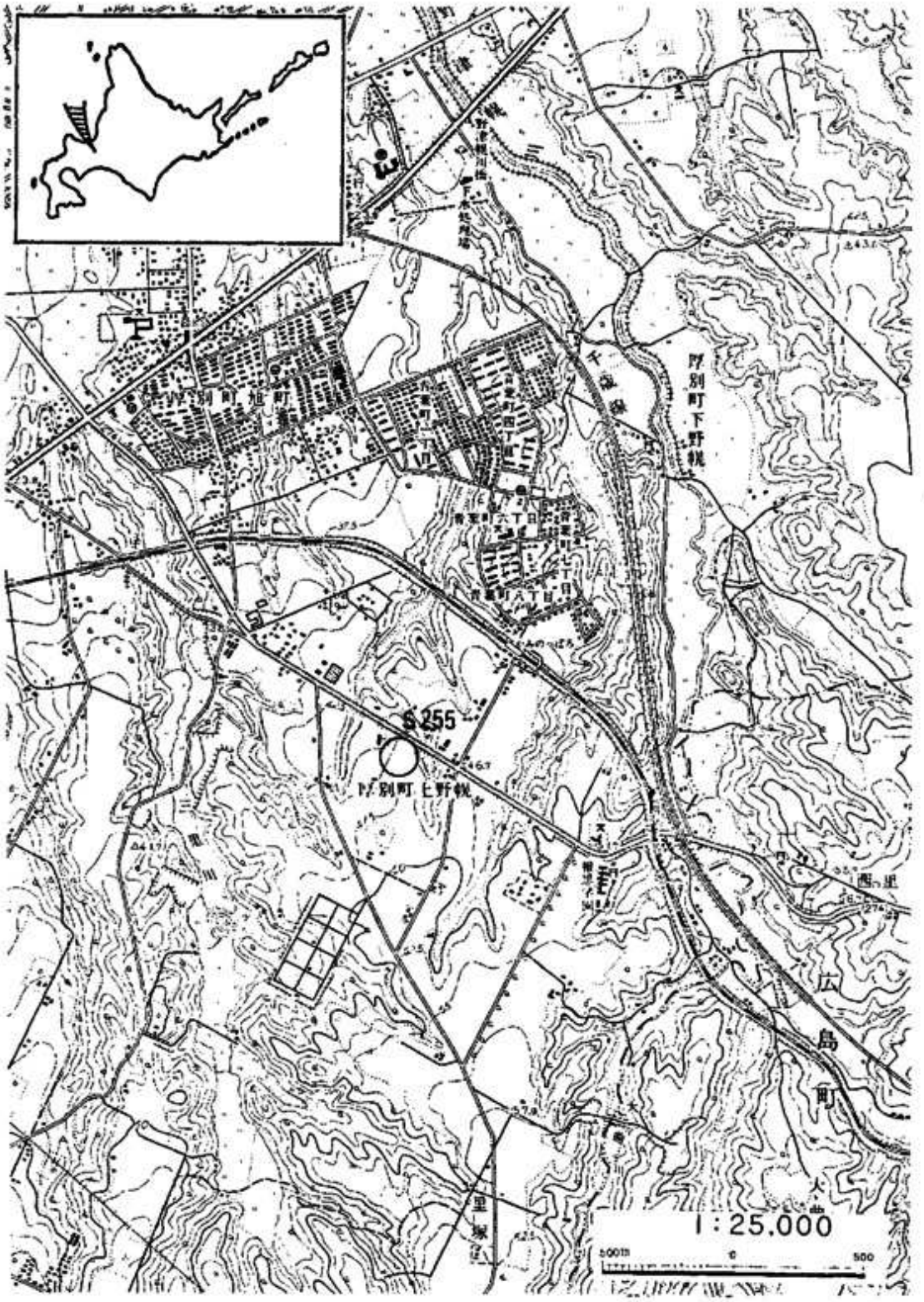
第1図　遺跡付近地形図（1：25,000）……9
第2図　遺跡地形図……13
第3図　発掘区配置及び遺構関連図……17
第4図　第1号竪穴住居址……22
第5図　第1号竪穴住居址出土土器拓影……23
第6図　第1号竪穴住居址出土石器実測図……24
第7図　第2号竪穴住居址……25
第8図　第2号竪穴住居址出土土器拓影……27
第9図　第2号竪穴住居址出土石器実測図……29
第10図　第3号竪穴住居址……31
第11図　第3号竪穴住居址出土土器（1）……32
　　第1号ピット出土土器（2）実測図……32
第12図　第3号竪穴住居址出土土器拓影……33
第13図　第3号竪穴住居址出土土器拓影……34
第14図　第3号竪穴住居址出土石器実測図……36
第15図　第3号竪穴住居址出土石器実測図……37
第16図　第4号竪穴住居址……40
第17図　第4号竪穴住居址出土土器拓影……41
第18図　第4号竪穴住居址出土石器実測図……43
第19図　第4号竪穴住居址出土石器実測図……44
第20図　Tピット……46
第21図　第1号ピット……48
第22図　第1号ピット出土土器拓影……50
第23図　第1号ピット出土石器実測図……51
第24図　石屑廃棄所出土土器拓影……53
第25図　石屑廃棄所出土石器及び剥片実測図……54
第26図　発掘区出土土器拓影……56
第27図　発掘区出土土器拓影……57
第28図　発掘区出土石器実測図……59
第29図　発掘区出土石器実測図……60
第30図　発掘区出土石器実測図……61

挿表目次

第1表　S255遺跡竪穴住居址石器組成……64
第2表　S255遺跡遺構一覧表……69
第3表　S255遺跡出土石器一覧表……70

図版目次

図版1　A遺跡遠景……77
　　B発掘区……77
図版2　A第2号竪穴住居址（西より）……79
　　B第3号竪穴住居址（西より）……79
図版3　A第4号竪穴住居址（西より）……81
　　B第3号竪穴住居址出土土器……81
図版4　A竪穴住居址発掘風景……83
　　B竪穴住居址発掘風景……83
図版5　A第1号Tピット（西より）……85
　　B第2号Tピット（西より）……85
図版6　復元土器（1第3号竪穴住居址　2第1号ピット）……87
図版7　A第1号竪穴住居址出土土器……89
　　B第2号竪穴住居址出土土器……89
図版8　A第3号竪穴住居址出土土器……91
　　B第4号竪穴住居址出土土器……91
図版9　A第1号ピット出土土器……93
　　B石屑廃棄所出土土器……93
図版10　A発掘区出土土器……95
　　B発掘区出土土器……95
図版11　A第1号竪穴住居址出土石器……97
　　B第4号竪穴住居址出土石器……97
　　C第2号竪穴住居址出土石器……97
　　D第3号竪穴住居址出土石器……97
図版12　A第2号竪穴住居址出土石器……99
　　B第4号竪穴住居址出土石器……99
　　C第3号竪穴住居址出土石器……99
図版13　A竪穴住居址出土接合剥片……101
　　B第4号竪穴住居址出土石器……101
図版14　第1号ピット・石屑廃棄所出土石器……103
図版15　発掘区出土石器……105



第1図　遺跡付近地形図（1：25,000）

この地図は、国土地理院発行の 2.5万分の1地形図(札幌東部)を使用したものである。

第１章　発掘調査に至る経過

札幌市の東部地区は、市当局が推進中の副都心化構想により、近年道路整備、地下鉄東西線延長などとともに、この副都心構想に参画する企業の宅地造成を中心とする大規模な開発事業が続々と行われている。

札幌市教育委員会では、昭和47年度よりこれらの大規模な開発事業によって当然予想される埋蔵文化財（遺跡）の破壊を未然に防ぐ目的のもとに、埋蔵文化財の所在確認の為の分布調査・周知の徹底化・開発当事者との事前協議制の確立・記録保存の体制の整備等を重点的に行って来た。

結果、札幌市中全域に450余ヶ所の埋蔵文化財包蔵地の所在を確認、当地区における大型の開発事業については、これらの資料をもとに事前協議が行われ、関係各機関の協力を得て現在まで20余ヶ所の遺跡の発掘調査が行われ、その結果はすでに文化財調査報告書として刊行されている。

市当局によって厚別副都心化構想がたてられた時点での埋蔵文化財に対する認識は、ほとんど皆無に等しく、都市計画の中で遺跡地を公園等として現状保存する等の考慮も一切はらわれていなかった為に、事前協議が行われた昭和47年以降ではすでに各開発事業が進行中であり、遺跡の現状保存は、副都心構想における基本の都市計画の根本に至るまで変更せざるを得ないといった後手の状況が現在にまで至っているという事実がある。基本的には遺跡は現状保好されるのが最も良いのであるが、結果として妥協せざるを得ず、最大限の記録・保存を目的とした発掘調査が行われたものである。

今回発掘調査が行われたＳ255遺跡は、副都心構想に参画する丸紅株式会社が所有する白石区厚別町上野幌地区の宅地造成予定地内にある。

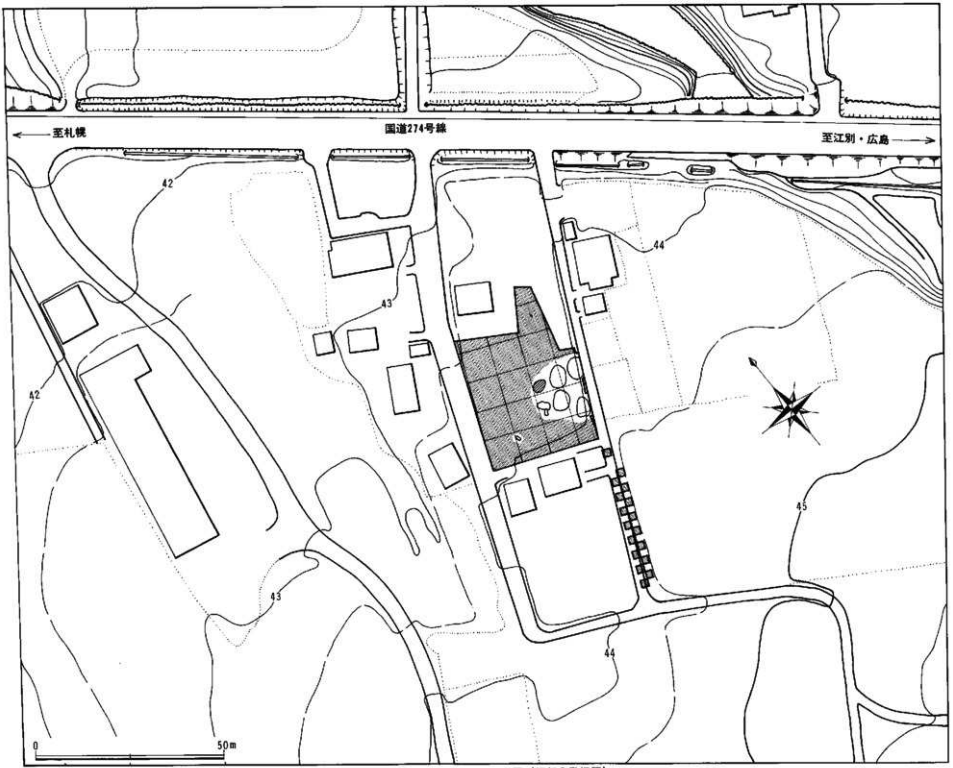
上野幌の丸紅株式会社が所有する宅地造成予定地内の遺跡については、昭和49年度春にその所在・範囲・規模の確認調査が実施され、さらにその取扱いについての事前協議が市教育委員会との間で行われ、同年夏に３遺跡の発掘調査が市教育委員会が主体者となり行われた。この結果はすでに、札幌市文化財調査報告書XIとして刊行されている。

尚、本遺跡については、昭和49年当時においては宅地造成工事の着工時が数年先であり、遺跡地は、数人の地主によって分筆登記されており、買収にまで至っておらず、発掘調査は、買収が完全に終了する工事の着工直前までもちこす事となっていたものである。

昭和53年４月に至り、丸紅株式会社に宅地造成工事が認可され、遺跡地の買収も終了した為、今回発掘調査を実施したものである。

また本遺跡が所存する地域は、宅地造成地と国道274号線を連絡する道路予定地となっており、地下に上下水管が埋設され、工事用の通路としても使用される事となっており、宅地造成工事が本格化する６月中旬までに発掘調査を終了させる事等が丸紅株式会社側から要望された。

発掘調査の実施にあたっては、これらの要望を考慮し、５月中旬より着手することとなった。また整理作業・報告書の刊行といった発掘調査後の諸作業についても昭和53年度中に全て完了させる事となった。



第２図　遺跡地形図（網部分発掘区）

第２章　遺跡の位置と環境（第１・２図）

Ｓ255遺跡は、札幌市中の東部寄りの広島町との行政界に近い白石区厚別町上野幌にある。遺跡の正規な番地等は、例言に記したとうりである。

本遺跡の位置は、国道274号線（札幌－夕張線）と市道厚別・大曲線の交差点より、国道274号線（札幌－夕張線）を、江別市、広島町方向に350ｍ程進んだ国道沿いの右側一帯が本遺跡である。

本遺跡をのせる台地は、江別・広島・札幌の東部にかけてある一段高い丘陵地であり、一般的には「野幌丘陵」と称されるもので、石狩低地帯の東側に位置している。

最近では、この野幌丘陵について動植物の分布・開拓時の様相・先史遺跡の分布調査等総合的な研究が北海道開拓記念館で行われている。

先史遺跡の分布では、関連する札幌市、江別市、広島町の３市町の遺跡数は、札幌73ヶ所、江別86ヶ所、広島45ヶ所あり総数で204ヶ所の遺跡の分布が確認されているという。

時期は、縄文時代早期～擦文時代さらにはアイヌ期に至っているという。中でも縄文時代中期の遺跡が最も多く発見されているという（野村1978）。

本遺跡付近での丘陵の状態は、三里川、厚別川、野津幌川によって分断され、さらにいくつかの支流・小支谷により狭長な沢、谷がきざまれている。

本遺跡をのせる台地に関連する沢については、東と西の２叉に分れ、東側に位置した沢がさらに２叉に分離している。本遺跡は、分離した沢の間の台地上に立地している。両側の沢の下面との比高は、10ｍ内外である。

これらの沢とさらに東側にある野津幌川の支流である沢を、先年Ｓ256、257、253遺跡を発掘調査した際、調査者の１人である上野は、西側からＡ谷、本遺跡に関連する沢をＢ谷、さらに東側にあり野津幌川の支流となる沢をＣ谷と便宜的に仮称している（上野他1975）。

さて本遺跡付近に分布する遺跡は、本遺跡に関連する沢（Ｂ谷）沿ではＳ239遺跡、Ａ谷ではＳ253遺跡、Ｃ谷ではＳ256、257遺跡、さらに対岸にＳ259遺跡の６ヶ所遺跡の分布が知られている。

Ｓ259遺跡は、河野広道氏らによって古くより知られた遺跡であり縄文時代中期の「平岸天神山式土器」に類似する資料が得られているという（河野・宇田川他1963）。

他の遺跡は、全て発掘調査がなされており、その概要も報告されている。

Ｓ256遺跡では、縄文時代早期末葉と考えられ、かっては東釧路Ⅲ式土器と称せられた、細い粘土紐の貼付帯、絡縄体圧痕文等が特徴的な「中茶路式土器・コッタロ式土器」が多数発見され、同時期の竪穴住居址が３軒隣接して検出されている。

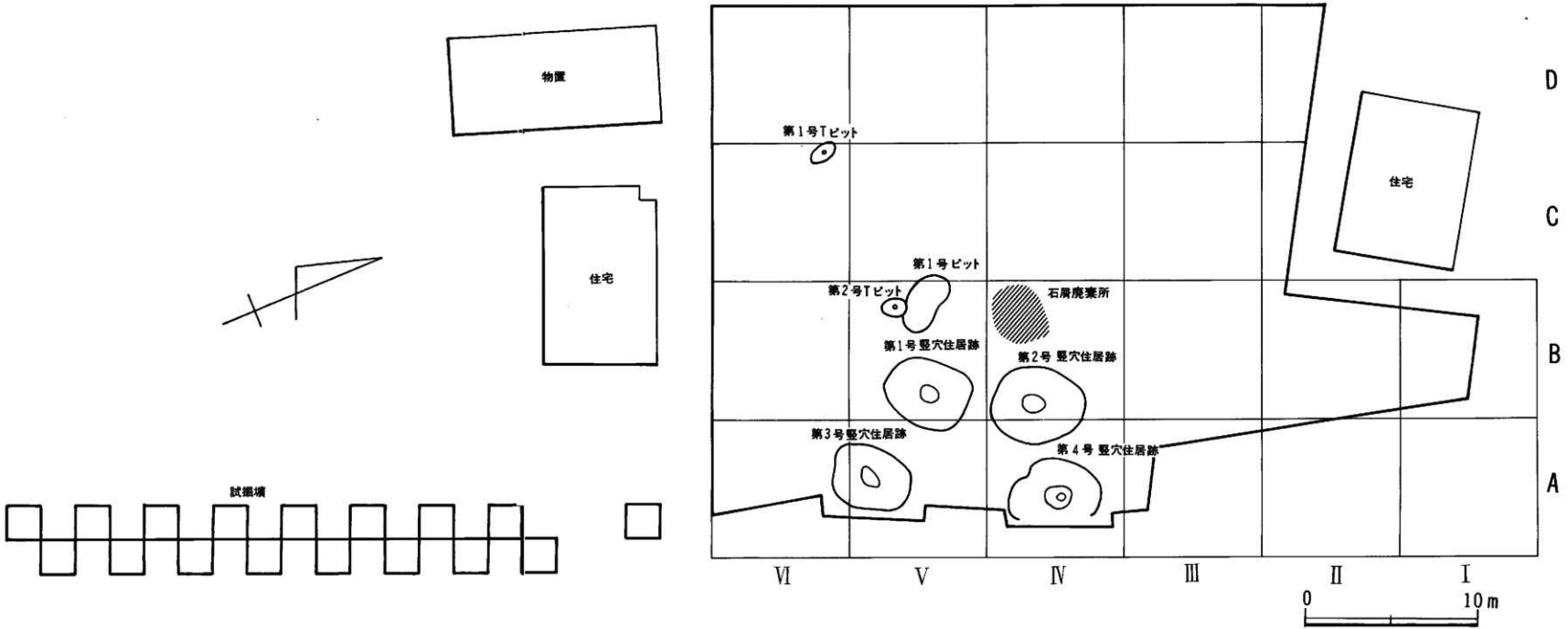
Ｓ257遺跡は、ごく微量の縄文時代晩期に属する土器が得られたのみであり、Ｓ253遺跡も同様な状態で２点の石器が得られたのみであった（上野他1975）。

S239遺跡は、縄文時代中期の土器が若干検出され、本遺跡（S255）にて発見された陥穴と考えられる楕円形の深いピット（Tピット）と同様のものが2個発見されている（上野他1975）。

これらのすでに発掘調査がなされた遺跡群の様相は、S256遺跡を除いてかなり小規模で、遺物の数も微量であり、発見された遺構もS239遺跡で発見された陥穴と考えられるTピットのみと非常に貧弱な様相を示めしている。

この遺跡が小規模な点、遺物等が貧弱な事実は、野幌丘陵にある札幌市域に属する遺跡群の共通する特徴である。

先にも記したが、野幌丘陵上にある札幌市域に属する遺跡は総数73ヶ所あげられているが分布図を観察すると、数例の遺跡を除いて、地形的な立地条件より考え、大規模な遺跡を営む条件を満してはいなかったように思われる。大部分の遺跡は、狩場での一時的な仮住居であったり、移動の際のキャンプ地であったりした可能性が大きいと考えられよう。



第3図　発掘区配置及び遺構関連図

第３章　発掘区の設定と遺跡の層序

第１節　発掘区の設定（第３図）

今回の発掘調査は、例言にて述べて来たように、全幅32ｍの道路敷設予定地域内に所在する遺跡（埋蔵文化財包蔵地）を対称としたものである。

道路予定地内の西側部分は、8ｍ幅の現有の私道があり、さらに私道沿いには幅1.5ｍ程の深い側溝が掘られており、遺跡はこの部分についてはすでに壊滅していた。

住宅２軒の間にある700㎡程の畑には多くの遺物の散乱が地表上にみられ、遺跡の主体部は道路予定地内の東側に位置すると考えられた。

発掘区の設定にあたっては、西側部分にある私道沿いに掘られた側溝の縁にあった、土地境界杭を基線とし、遺物が地表に散乱している畑、民家の庭部分を８ｍ×８ｍの網目でおおった。

発掘当初には、各発掘区の北側と東側に１ｍ幅の地層観察をかねた畔を残したが、最終的には全面にわたり遺構確認面である黄褐色粘質土の上面まで掘り下げた。

Ａ－Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ区では、竪穴住居址が２軒、道路予定地外にまで広がるため、個々の地主の方の了解を得、発掘区を拡張し調査を行った。

発掘区の南側については、まだ未売収地が800㎡程残され、住宅、物置（納屋）、庭木が残されていて、移転のめどがまだたっていない状況にあった。遺構の分布状態、遺物の出土状態は、むしろ道路予定地の東側に偏在している為、一応の目安として生活に支障の無い部分に２ｍ×２ｍの試掘壙を掘る事を了解していただき、17個の試掘壙を調査した。結果遺物は一切無く、遺構の存在も皆無であった為、発掘調査は行っていない。

発掘区の名称は、東－西にＡ～Ｄ区、南－北にⅠ～Ⅵ区とした。

発掘対称面積は、当初1,500㎡であったが、遺構の分布状況、私道側溝部分についてはすでに破壊されている事、さらに発掘が事実上不可能な住宅下等の存在より実質的な発掘総面積は、1,100㎡であった。

第２節　遺跡の層序

本遺跡の、遺物包含層は近隣の遺跡群（Ｓ256、257遺跡）と同様に表土層を形成する黒色の腐植土が厚さ20～30cmと未発達な状態であり、さらに永年にわたる耕作の爪跡は、基盤の黄褐色粘質土の上面にまでおよび、遺物包含層＝撹乱層（耕作土）の状況であった。為に発掘区での層準は記録していない、出土した遺物についても遺構中より得られた物以外は、層位的な確認を得た資料は皆無である。

耕作による撹乱状況は、予想以上に激しく遺物も数10ｍ以上も動かしたと思われ、第２号竪穴住

居址の覆土層中より得られた網代文を有する土器の底部に10m以上はなれたC　Ⅳ区から得られた土器片が接合される等の事実も検証されている。

遺構の存在は、耕作上を完全に剥土した段階で黄褐色粘質土層の上面にて、汚れた、黒色の落ち込みとしてみられる。

黄褐色粘質土中には、一切の遺物は包蔵されてはいない。

遺構は、すでに耕作上として攪乱されてしまっているが、かっては黒色を呈した腐植土層が存在しており、このいずれかのレベルより掘り込まれたものと考えられる。

竪穴住居址に於いては、床面の位置（レベル）は深くても遺構の存在が確認される黄褐色粘質土層中までである。しかし陥穴であろうと考えられている深さが１ｍ以上を超すＴピットでは、黄褐色粘質土、さらに下位の厚別砂礫層の一部と考えられる火山灰質砂層を掘り抜き、灰褐色を呈し数10ｍの厚さにまで堆積している支笏墳出物である火山層にまで掘り込みがおよんでいる。

第４章　遺構及び遺構出土の遺物

本遺跡からは、隣接する４軒の竪穴住居址と、２個のＴピット、性格の不明なピットが１個、さらに４軒の竪穴住居址に隣接して黒曜石の１cm未満の小片が数千と集中してみられる石屑の廃棄所と考えられる遺構が検出されている。

第１節　竪穴住居址

第１号竪穴住居址（第４図）

Ａ－Ｖ区、Ｂ－Ｖ区にまたがって位置し、遺構は、表土層を剥ぎ黄褐色粘質土の上面（遺構確認面）を露出した時点でその存在、プランが確認された。

規模は、長径4.65cm、短径3.8m程である。

プランは、長軸の北東側がやや丸味を帯びるが、変形した隅丸の五角形状といってさしつかえないであろう。

長軸方向は、北東－南西方向である。

床面と壁とは、明確に区別されない程に、浅い皿状の断面形を呈している。

床面の状況は、ほぼ平坦に近く、かたく踏みかためられており、覆土とは、その色調、硬さにおいていちぢるしい差位があり明確に区別された。

床面の中央部には、100×80cm程の範囲に炉址と考えられる焼土の集積が認められている。

非常に恥しい事ではあるが、本竪穴住居址の発掘調査では、本竪穴住居址が非常に浅く皿状を呈し、床面と覆土とが色調、硬さ、遺物の有無にて明確に区別されたにもかかわらず、調査者の未熟ゆえ、床面を掘り抜いてしまい、第２号竪穴住居址、第３号竪穴住居址の発掘調査にて初めて竪穴住居址と断定されるに至った為、埋土の状況を記録していない。しかし、その深さ概要等第３号竪穴住居址に類似している為、埋土の状況も第３号竪穴住居址とほぼ同様であろうと推定される。

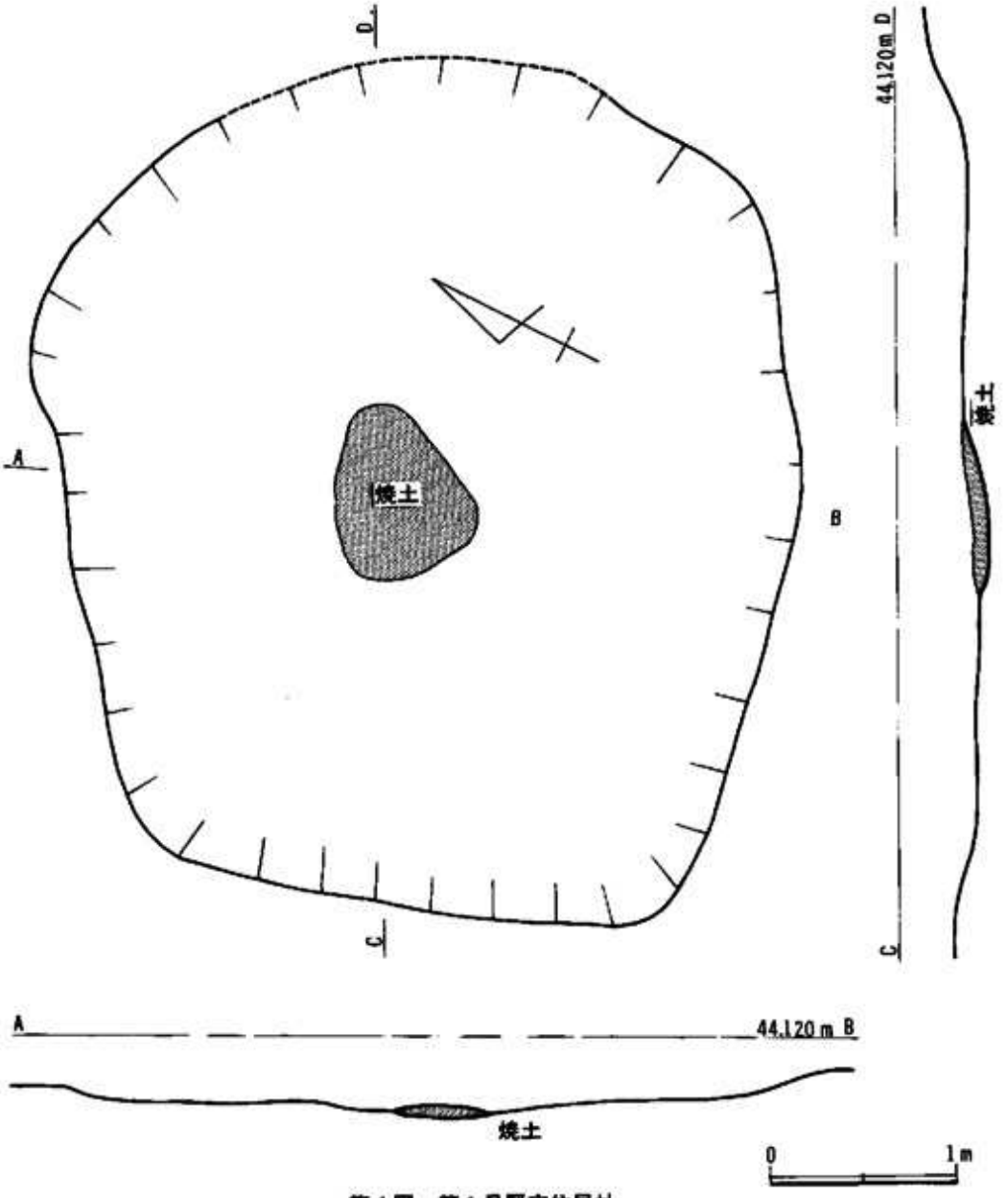
遺物は、比較的少なく、床面を中心として覆土中にも若干含まれていた。

第１号竪穴住居址出土土器（第５図）（図版７Ａ）

床面より出土したものが大部分であり、若干覆土中にも含まれていたのもある。

比較的厚手の円筒形を呈する縄文土器で、口縁部に１～２cm間隔でめぐる円形刺突文が特徴とされる「トコロ６類土器」によって代表される土器群が単一的に得られている。

口縁に肥厚帯を有し、若干外反し、さらに小突起を有している。肥厚帯上には２段のへら状工具の先端を連続して押し付けた連続刺突文があり、肥厚帯下には直径１cm程の丸い棒状工具を使用した円形刺突文が２cm程の間隔をもって周囲をめぐっている。地文として左下りの単節縄文が施文されているもの（１）。

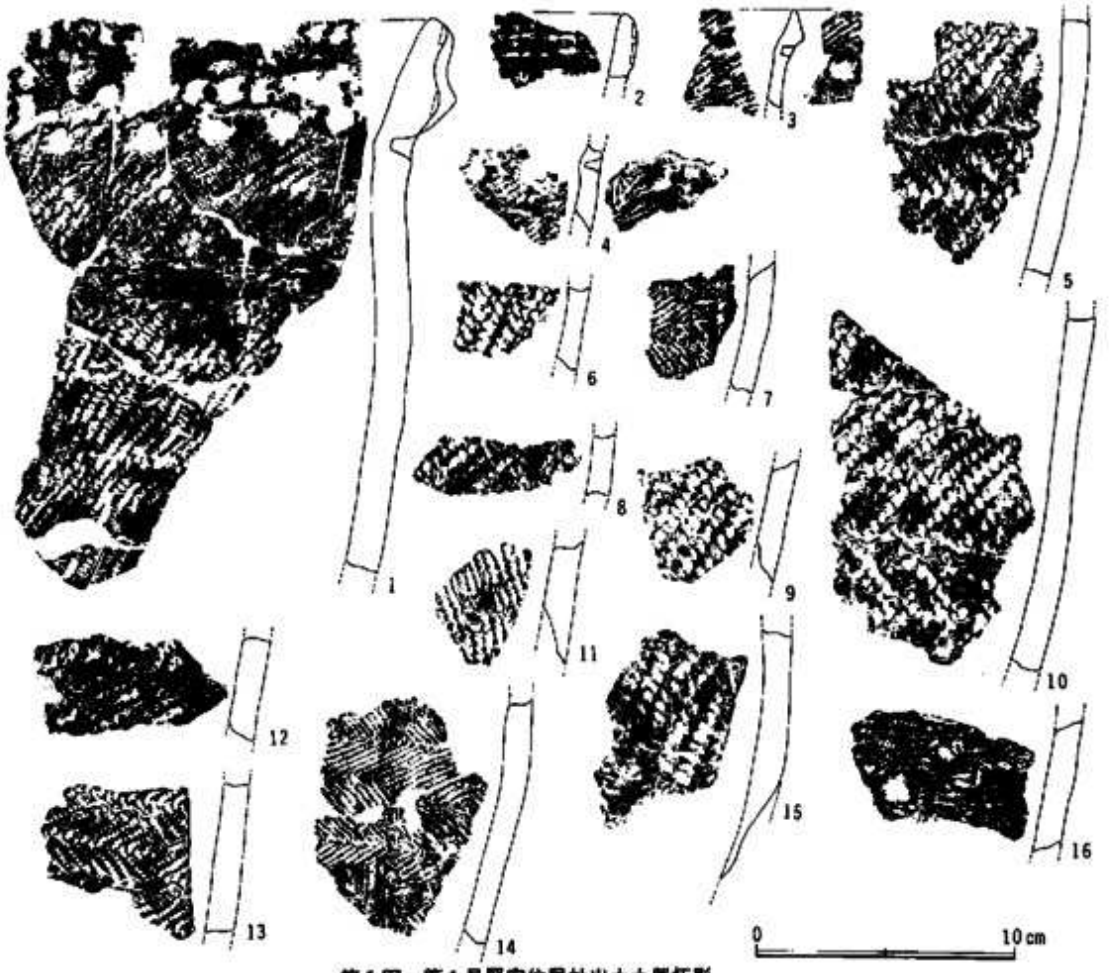


第4図　第1号竪穴住居址

口縁に肥厚帯を有し、肥厚帯上にへら状工具による波線状を呈する連続刺突文が2段施文され、肥厚帯直下には、円形刺突文がめぐる（2）。

断面が三角形状を呈する肥厚帯を有し、肥厚帯直下に直径4mm程の円形刺突文をめぐらす、地文として肥厚帯上さらに胴部にかけ左下りの縄文を施文し、さらに土器内面にまで同一の縄文原体を使用した縄文を施文するもの（3）。

円形刺突文が2cm間隔にめぐり、地文として左下りの単節縄文が器面と内面にまで施文されるも



第5図　第1号竪穴住居址出土土器拓影

の（4）がみられる。

胴部では、右下りの無節縄文の施文されたもの（11）、左下りの単節縄文の施文されたもの（6、8、9、12、15）、右下りの単節縄文の施文されたもの（16）、単節の羽状縄文が施文されたもの（5、7、10、13、14）等がみられる。

胎土中には、砂粒を多く含んでおり、かなりの大きさの小石まで混入しているものもみられる。さらに植物性繊維を混入したと考えられる痕跡を有するもの（1、3、5、6、8～10、12～16）が大部分を示めている。

焼成は、比較的良好である。

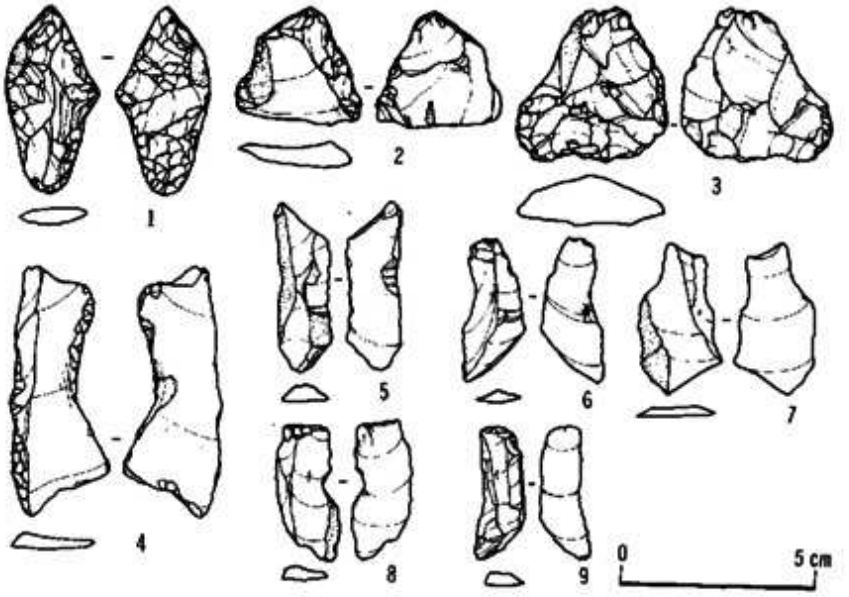
色調は、茶褐色（1、5、7～10）暗褐色（2、4、13）黄褐色（3、6、11、12、14～16）を呈している。

器厚は、0.5cm～1.2cm程度である。

第１号竪穴住居址出土石器（第６図)(図版11Ａ)

石器の数は、非常に少なく、黒曜石の剥片が多い。

石鏃先（１）比較的小型の鏃先であり、入念に両面加工が施されている。左右は対称形ではなく、表面の左側縁にはかえし部がなく丸味を帯びている。刃部（尖頭部）は全長に比して短かく、太く幅広の柄部が作出されている。表面、裏面ともに一部原石面を残している。



第６図　第１号竪穴住居址出土石器実測図

削器（２～４）２は、幅広の剥片の一側縁のエッヂに主剥離面より細かな加工を施し刃部としたものである。３は、表面、裏面の交互よりの比較的大きな剥離痕がみられることより円盤状の石核であったとも考えられる資料である。しかし、周囲のエッヂ部は細かな加工痕があり、削器として再使用されたものであろう。４は、バルブ面を欠損している縦長剥片の左右両側縁のエッヂに主として主剥離面側よりの加工を施したものである。

縦長剥片（５～９）いずれも黒曜石の縦長剥片であり、母岩（石核）より連続的に剥離されたものと考えられる。バルブ面と打点を残しているもの（６、８、９）よりみると、打点は比較的大きく、打面調整等が行われた痕跡は無い。石鏃、錐、削器等に再加工される素材であろう。

第２号竪穴住居址（第７図)(図版２Ａ)

Ａ－Ⅳ区、Ｂ－Ⅳ区にまたがって位置しており、第１号竪穴住居址の北側に隣接している。

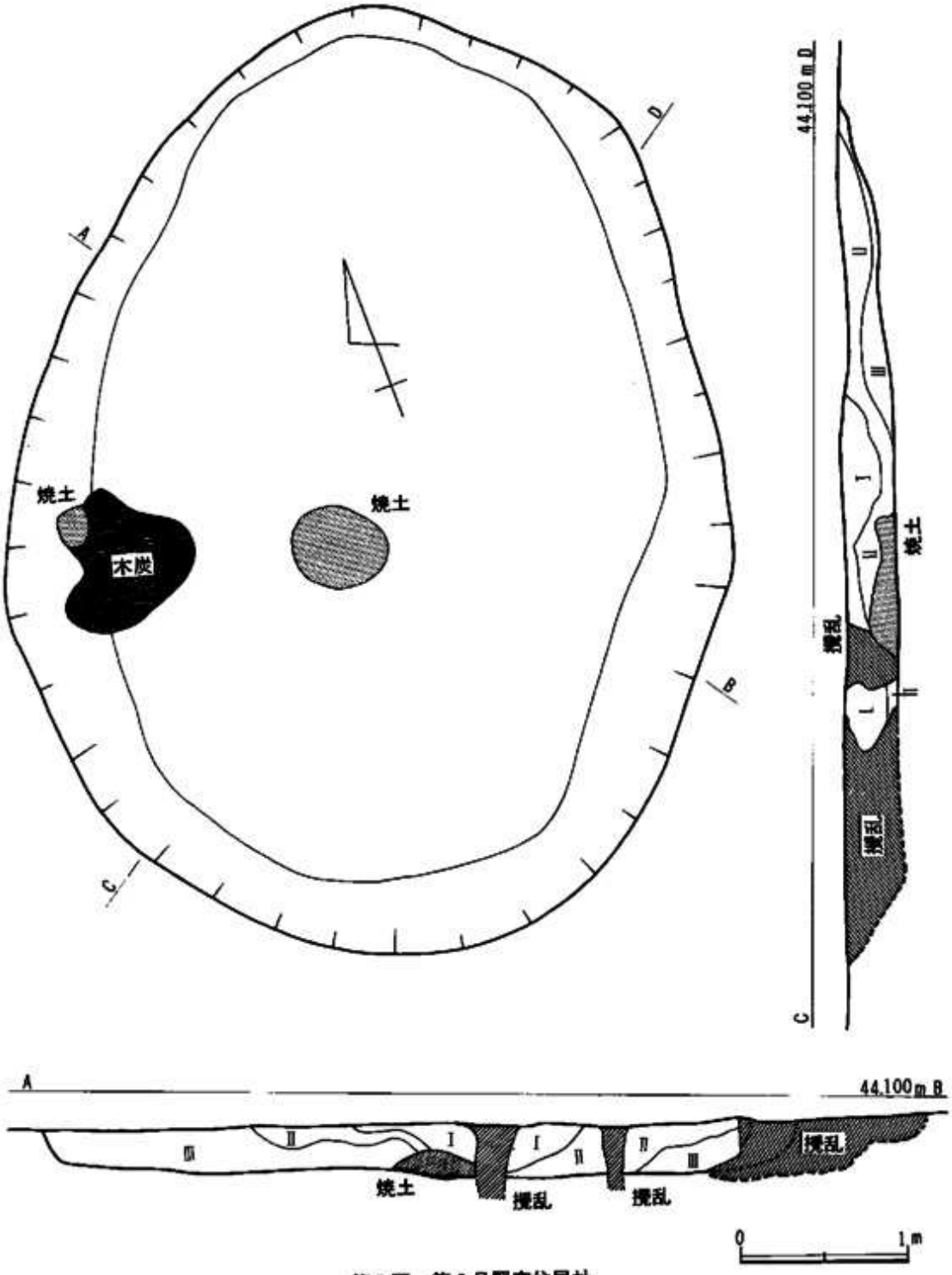
遺構確認面の黄褐色粘質土上面にてその存在とプランが確認されている。

規模は長径 5.7m、短径 4.3mあり、北側にて若干すぼまる卵形を呈している。

長軸の方向は、北北東－南南西である。

壁高は、北部にて20cm、南部にて35cm、東部にて30cm、西部にて30cmと、やや北側に浅い状況を呈している。

壁の状況は、比較的硬く、やや傾斜して下り、床面近くに至り丸味を帯びほぼ平坦な床面へと接



第7図　第2号竪穴住居址

して行く。

床面は硬く踏みかためられており非常にしっかりしている。床面の中央部には50×55cmの範囲で炉址と考えられる焼土の集積が認められている。

また西側の壁に沿って壁より若干浮いた状態で12×10cm程の範囲に広がる焼土の集積が認められた。さらに同一のレベルにて壁ぎわより床面にかけ流れ込んだ様な形で幅40cm呈の木炭まじりの灰層に近い土壌が検出されている。床面、壁面より浮いていた事より考え本竪穴住居址が廃棄された後の所産と思われ、本竪穴住居址と直接的にかかわりを有しない事が理解されている。

本竪穴住居址を埋没させた埋土の状況は、下記に示めしたが、本の根による攪乱、風倒木痕による攪乱により分断され、壁、床面が明確にされていない部分もある。

第Ⅰ層：黒褐色土

第Ⅱ層：暗茶褐色土

第Ⅲ層：褐色土

第2号竪穴住居址出土土器（第8図)(図版7B)

第1号竪穴住居址出土土器と同様の状態で、口縁部にめぐる円形刺突文が特徴となる「トコロ6類土器」によって代表される土器が単一的に出土している。

口縁部に肥厚帯を有し、さらに小突起がある。口唇の断面形は、三角形に近い。肥厚帯下には、直径7mm程の円形刺突文が3cm間隔にめぐっている。地文として無節の右下り縄文が施文され、さらに土器の内面にまで施文されている（1）。

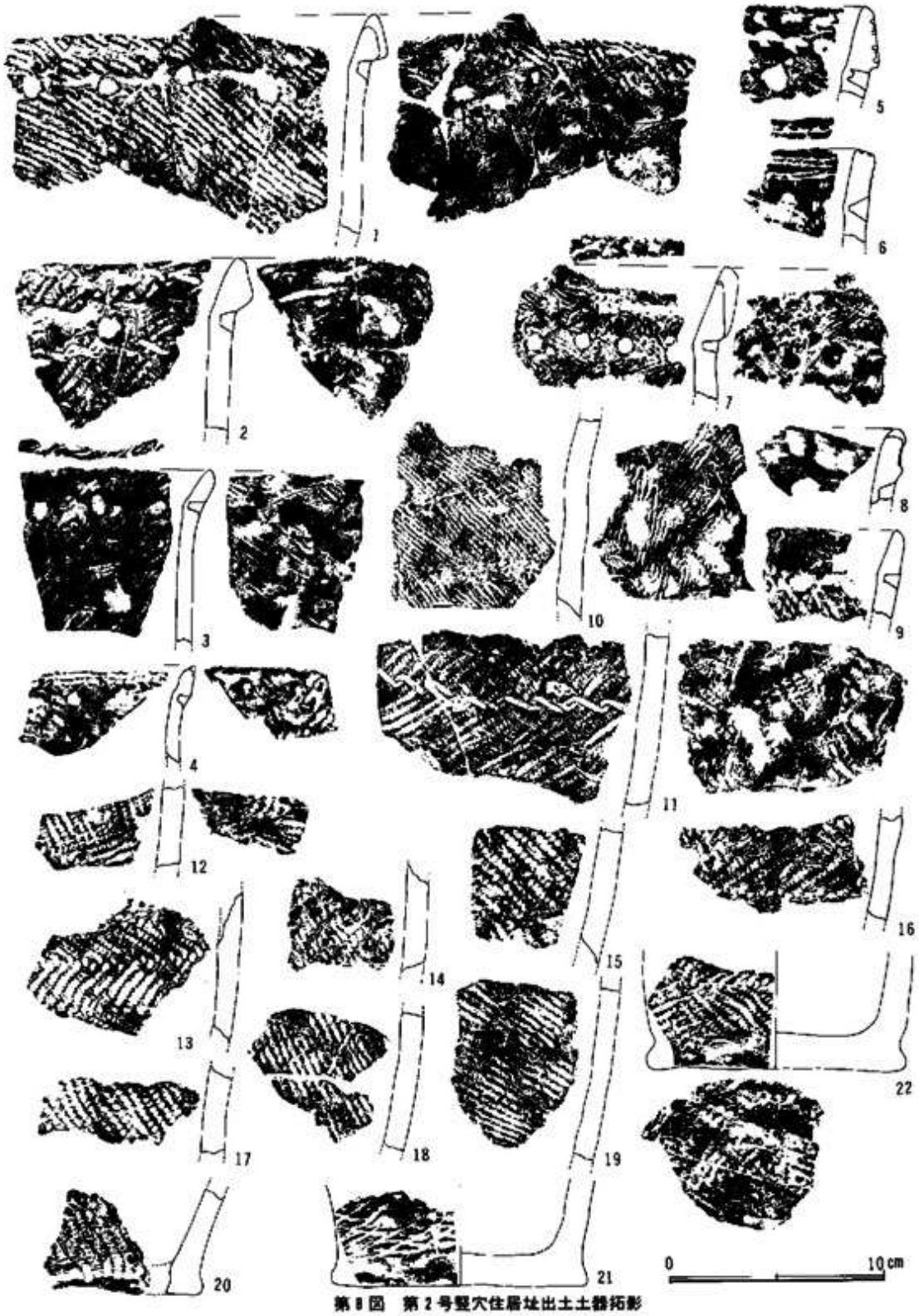
口縁部に肥厚帯を有し、断面形は三角形状を呈する。肥厚帯下には直径1cm内外の円形刺突文が3cm程の間隔でめぐっている。地文として単節の左下りで綾くり文を有する縄文が肥厚帯上、頸部・胴部に施文され、さらに土器内面にまで施文されているもの（2）もある。

口縁部がやや肥厚し、肥厚部がやや外反する。肥厚部直下に直径6mm程の円形刺突文が2cm間隔でめぐる。地文として左下りの単節縄文が器面に施文され、さらに土器内面にも施文される（3）。

平縁で口縁がやや外反し、口唇直下に細い棒状工具の先端を連続的に押し付けた連続刺突文が2段めぐっている。その下には、直径5mm程の円形刺突文が1.5cm間隔でめぐっている。無節で左下がりの縄文が地文として器面及び内面にまで施文されている（4）。

口縁部が肥厚し、断面が三角形状を呈する肥厚帯上には、半截竹管状工具の内面を斜に連続して押し付けた連続刺突文が2段めぐる。肥厚帯下には直径1.1cm程の竹管状工具による円形刺突文がめぐる（5）。

口縁がやや肥厚し、断面形が角頭状をなし、口唇上に半截竹管状工具の内面を連続的に押圧した連続刺突文が一段ある。さらに口縁には、口唇上に施文されたと同様の工具の内面を押し引いて施文した沈線状連続刺突文が2段平行して施文される。さらにその下位に直径8mm程の円径刺突文がめぐる。地文として左下りの単節縄文が器面に施文される（6）。



第8図　第2号竪穴住居址出土土器拓影

口縁部が若干肥厚し、小突起が存在する。口縁の断面形は三角形状を呈しやや外反する。肥厚帯下には、直径7mm程の円形刺突文が1.5cm間隔にめぐる。地文として単節の羽状縄文が器面及び内面にも施文される（7）。

口縁部が若干肥厚し、断面形は三角形状を呈する。小突起がありゆるやかな波状を呈する。肥厚帯上には幅1.2cm程の先端がささくれだった粗雑なへら状工具を用いての連続刺突文が一段施文され、さらに下位に直径1.2cm程の円形刺突文をめぐらす（8）。

平縁で口唇下2cm程に直径8mm程の円形刺突文をめぐらす。地文として右下りの無節縄文を施文する（9）。

胴部に至っては、右下りの無節縄文が地文となり内面にも同一の縄文を施文する（10）。

左下りのあやくり文のある単節縄文を地文とし、内面にまで施文する（11）。

羽状縄文を地文とし、内面にも同様に施文する（12）ものを除く他は、右下りの無節縄文（18、19）、右下りの単節縄文（15、17）、左下りの単節縄文（14、16）、羽状縄文（13）を地文としている。

底部では、底面がやや張り出すものが大部分であり、底面にまで縄文を施文するもの（22）、網代状に撚糸の圧痕がみられる文様のみられるもの（21）等がある。

胎土中には、多くの砂粒、小石までを混入しているものが大部分であり、植物性繊維が混入された痕跡を有するもの（2～6、10～15、18、21、22）が多い。

焼成は、全例とも比較的良好である。

色調は、暗褐色（2、5、6、10）、黄褐色（14～16、19～22）、茶褐色（1、3、4、9、11～13）、褐色（7、8、17、18）等を呈している。

器厚は、1.0～1.2cm内外である。

第2号竪穴住居址出土石器（第9図）（図版11C、12A）

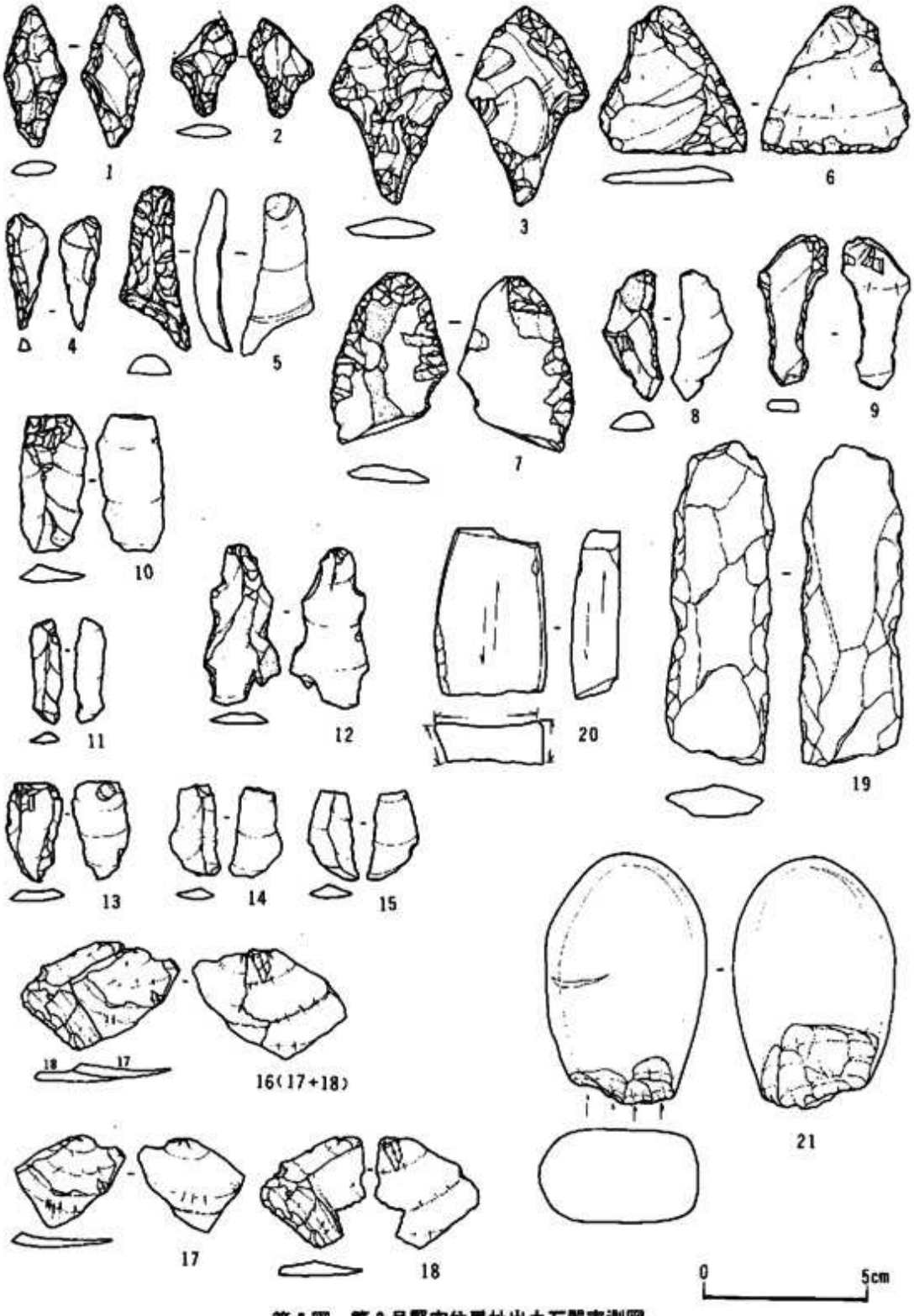
石器の数は少なく、剥片の数が多い。

石鏃先（1～3）　1は、剥片を素材として周辺より剥離加工を施し、尖頭部と、太い柄部を作出している。背面には大きく主剥離面を残している。尖頭部は未成品の為鋭くなく若干原石面を残している。全体的な形状は柳葉形となりかえし部分もそれほどの張り出しを見せない。

2は、小型の鏃先で刃部（尖頭部）を欠損している。左右は、かえしの状態よりみると対称形とはならない。太い柄部が作出されている。

3は、比較的大型の鏃先で、幅広の剥片を素材としている。背面には大きく主剥離面を残している。左右は、対称形に近く、刃部（尖頭部）は、二等辺三角形状を呈している。かえし部分は幅広で、柄部は下端で細くなっている。

石錐（4）　片岩を利用したもので下端に刃部（尖頭部）がある。刃部の断面形は台形に近くエッヂ部はやや磨滅している。



第9図　第2号竪穴住居址出土石器実測図

掻器（5）　縦長剥片を素材とし主剥離面より背の高い加工が全周にわたってなされている。

削器（6～9）　定形的なものではなく、全例剥片を素材とし、剥片の形に制約されながら剥片のエッヂ部に加工を施し刃部としたものである。

6は、やや幅広の剥片の左右両側縁のエッヂに細かな剥離加工が施され、主剥離面の下端にも刃部が作られている。

7は、剥片の左右両側縁のエッヂに加工がなされ、主剥離面の右側縁のエッヂにも刃部が作られている。

8は縦長剥片の右側縁のエッヂのみに加工が施され、主剥離面には一切加工痕がない。

9は、縦長剥片の左右両側縁のエッヂに主剥離面から剥離加工が施されたものである。

剥片（10～18）10～15は、縦長を呈する剥片類で、母岩（石核）より連続的に剥離されたものである。細かな再加工等は一切行われていない。

16は、幅広の剥片であり、17、18が接合された資料である。縦長の剥片と同様に母岩（石核）より連続的に剥離されたと思われる。

石斧未成品（19）緑色片岩を素材に短冊形に周囲を打ち欠き石斧状に整形したものである。

比較的薄手である。

砥石（20）小型の砂岩で長方形をしている。表面と左右両辺が擦面となり、研磨された方向に直交する断面にて中央部がややくぼみコンケーブしている。

敲き石（21）楕円状の円礫の下端に数々の敲打による表皮の剥脱がみられ、角が磨滅し、丸味を帯びている。石器等を製作する場合に用いられたハンマーストーンと考えられる。

第3号竪穴住居址（第10図）（図版2B）

A－V、A－Ⅳ区にまたがって位置し、遺構確認面である黄褐色粘質土の上面でその存在プランが確認された。表土剥土の段階より土器、石器等の遺物が特に多く見られた。

規模は、長径 4.5m 短径 3.5m で、深さは遺構確認面より最大で20cm程と、浅い皿状を呈する。

プランは、楕円形に近く南西部にて若干突出した部分がある。

長軸方向は、北東一南西で隣接する第1号竪穴住居址とほぼ並行する。

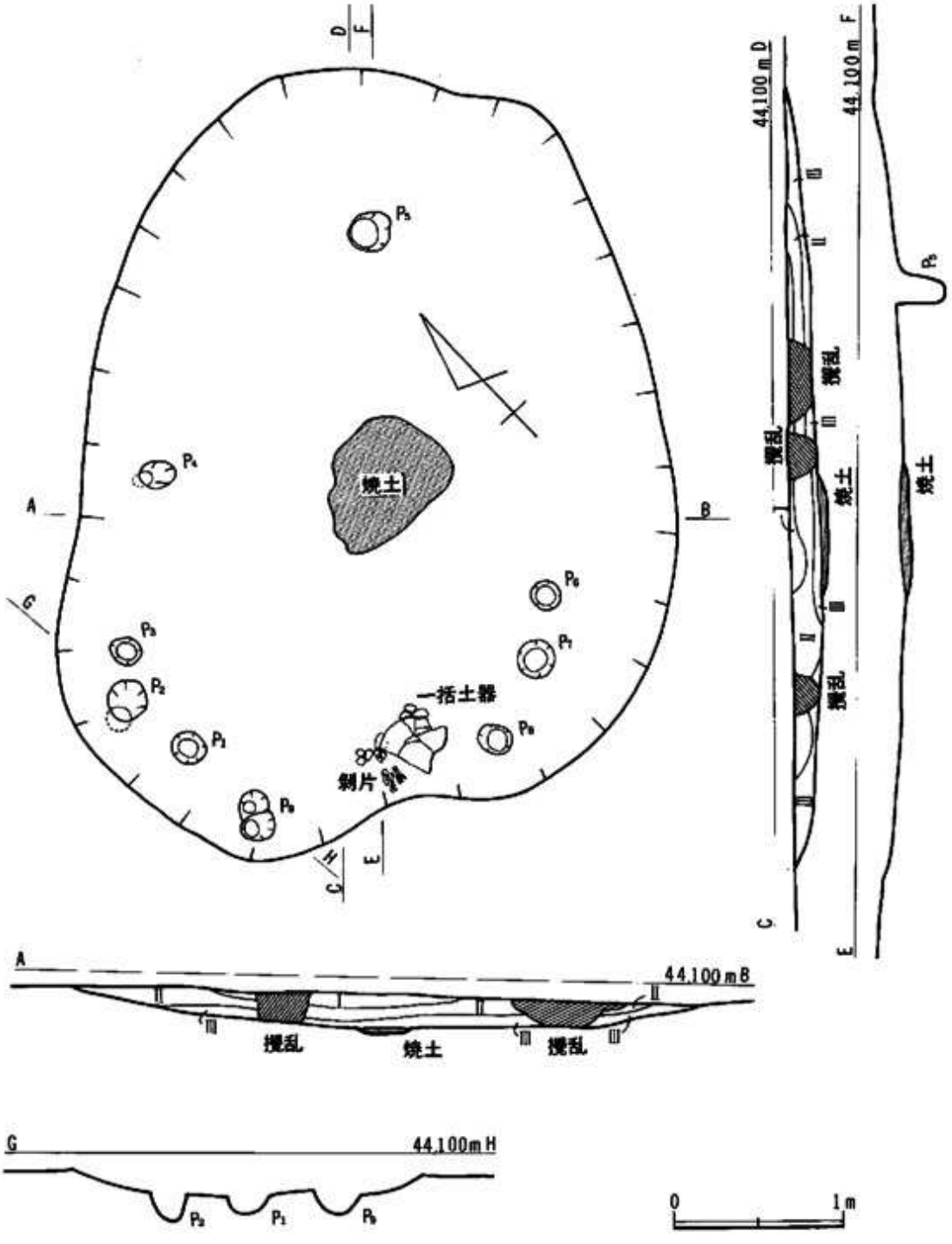
床面と壁は、明確に区別されない程浅い皿状の断面形を呈している。

床面の状況は、中央部が若干深いが、ほぼ平坦といえよう。床面は、かたく踏みかためられており、覆土とはその色調、硬さにおいていちぢるしい差位があり明確に区別された。

床面の中央部には、80cm×60cm程の範囲に炉址と考えられる焼土の集積が認められている。

床面の南東～北西部にかけての壁沿いには合計8個の直径20cm内外、床面より深さ20cm程の柱穴状小ピットがめぐっている。さらに北東部壁沿にも同様の柱穴状小ピットが1個検出されている。

特にP_4、P_2、P_9、P_7とした柱穴状小ピットは、床面の中央部に向け傾斜して掘られている。またP_5とした柱穴状小ピットは他のものより深く、規模も大きい。これらの事実よりP_5を主柱



第10図　第3号竪穴住居址

穴と考え、これに主柱が建てられ、他の柱穴に建てられた柱は、主柱に集められ結束された骨組となる構造を有していたのではないかと推定される。

本竪穴住居址を埋没させた埋土の状態は下記に示めしたが、所々木の根等の攪乱によって層が分断されている。

第Ⅰ層：黒色土

第Ⅱ層：やや明るい褐色土

第Ⅲ層：暗褐色土

第３号竪穴住居址出土土器（第11図１、第12図、第13図)(図版６、８Ａ)

全例「トコロ６類土器」によって代表される土器群で覆土中、床面より検出されたものである。

第11図に示めした土器は、南東部の壁沿いの覆土中より一括で得られたものである。

口径32.5cm、現存高27cmの大型の円筒形を呈する深鉢形土器である。

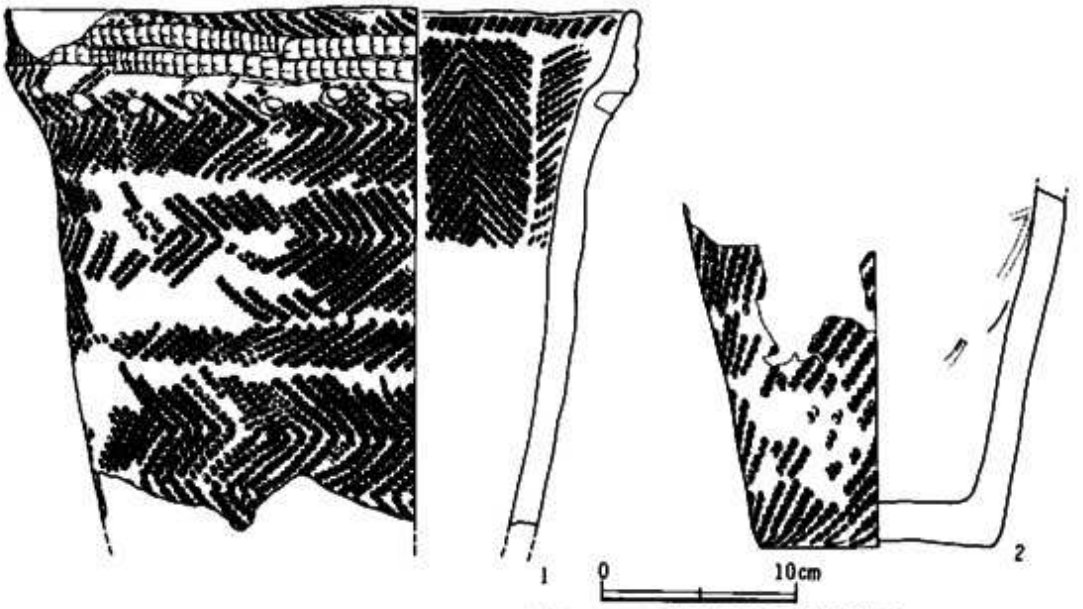
口縁部は肥厚しており、断面形は口唇が丸味を帯びた指頭状をなす、若干だが外反している。

肥厚帯上には、幅広のへら状工具を連続して押圧し沈線状に施文した連続刺突文が２段めぐっている。肥厚帯下には、直径 1.4cm呈の円形刺突文が３cm間隔でめぐっている。地文として単節の羽状縄文が施文され、土器内面にも口唇直下12cm程の部位まで同一の縄文原体を使用し、縦位に回転施文された羽状縄文が施文されている。

胎土中には、砂粒と小石を含み、さらに植物性繊維が混入していた痕跡をも有している。

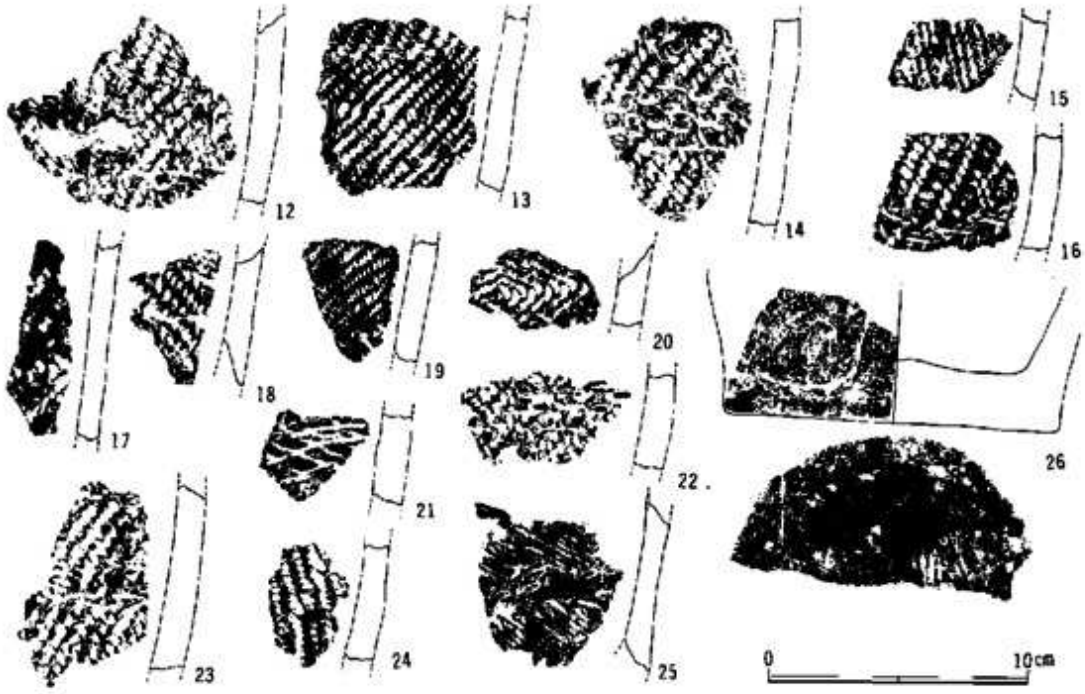
焼成は良好であり、色調も明るい黄褐色をなし、部分的に斑点状に赤褐色、暗褐色を呈している。

器厚は、1.5cmと厚い。



第11図　第３号竪穴住居址出土土器(1)第１号ピット出土土器(2)実測図

第12図　第3号竪穴住居址出土土器拓影



第13図　第3号竪穴住居址出土土器拓影

口縁部に肥厚帯を有し、小突起が付く。口縁はやや外反する。

口唇上に一段、肥厚帯状に2段の棒状工具の先端を斜に連続的に押引した連続刺突文がある。肥厚帯下には、直径 1.2cm程の円形刺突文が2cm～3cm間隔でめぐっている。

地文として左下りの単節縄文が施文されており、土器内面にもかなり下位にまで同一の縄文が施文されている（1、2、4、5、8、11）。

肥厚帯は無く、口唇は平らで角頭状をなし、直径約1cmの円形刺突文がめぐる。地文として右下りの単節縄文が施文される（3）。

口縁部に肥厚帯はなく、口縁部はやや外反している。

口唇上に一段、口唇下に二段の半截竹管状工具の内面を斜に連続的に押圧した連続刺突文が施文される。連続刺突文の下位には直径 1.0cmの円形刺突文が2cm間隔にてめぐっている。

地文として無節の撚糸を棒状のものにコイル状に巻き付けた「絡縄体」を回転させ、さらに方向を異として撚糸の圧痕文を交差させた網代文を施文している（6、7、21）。

胴部の地文の状態は、左下りの単節縄文が土器内面にまでおよぶもの（9、10）、右下りの無節縄文（15）、左下りの単節縄文（12～14、16、17、19、22～24）、右下りの単節縄文（18）、羽状縄文（20）等がある。

底部形は、胴部より垂下し底面に至って「くの字」状を呈する、底面にも縄文の施文されるもの（26）、底面がやや外に脹り出し、右下りの無節縄文が地文として施文される（25）の2種がある。

胎土中には、砂粒を多く含むものが多く中には直径 1.0cm程の小石をも混入してあるものがある。

さらに植物性繊維を混入してあった痕跡を有するもの（1、2、4～14、23、25）も非常に多い。

焼成は、比較的良好であり、色調も暗褐色（1、2、4～8、11、13、17、18、21）を呈するものが多く、黄褐色（3、9、10、12、14、15、19、20、22～25）、赤褐色（26）、褐色（16）等を呈している。

器厚は、1.0～1.5cm程である。

第3号竪穴住居址出土石器（第14図、15図）（図版11D、12C）

比較的数量、器種も多いが、接合剥片、磨製石鏃先、石斧の数量の多さ等が特徴とされる石器群である。

石鏃（1、2）　1は、薄手の幅広剥片に細かな剥離加工を施し刃部（尖頭部）と茎部を作出している。左右は対称形に近く、かえし部分の張り出しも少ない。全体的な形状は、柳葉形に近い。背面に主剥離面を大きく残している。

2は、縦長剥片のバルブ面に尖頭部を作出し、周囲に細かな剥離加工がなされ整形されている。全体的な形状は木の葉形に近く茎部にあたる下端（基部）は丸味を帯び薄くなっている。

石鏃先（3～5）　3は、刃部（尖頭部）の形状が二等辺三角形を呈するが、かえし部分は左右対称形とはならず右側が強く張り出している。太い柄部が作出されており基部には一部原石面を残している。

4は、幅広の大型の剥片を素材に入念な両面加工を施したもので、刃部（尖頭部）は鋭く、二等辺三角形を呈している。かえし部分は、左右対称形である。柄部は太く、舌状の基部をなしている。

5は、特異な、磨製の鏃先であり、緑色片岩の薄い剥片に剥離加工を施し打製の石鏃先と同様の形状に整え、その後に研磨し尖頭部、刃部に鋭い刃を作り出し、さらにかえし部分も研磨により作出されている。

刃部（尖頭部）は、三角形状を呈しかえしは左右対称形ではなく、左部分が強く張り出している。柄部は長く、基部に若干の剥離痕を残し舌状を呈している。

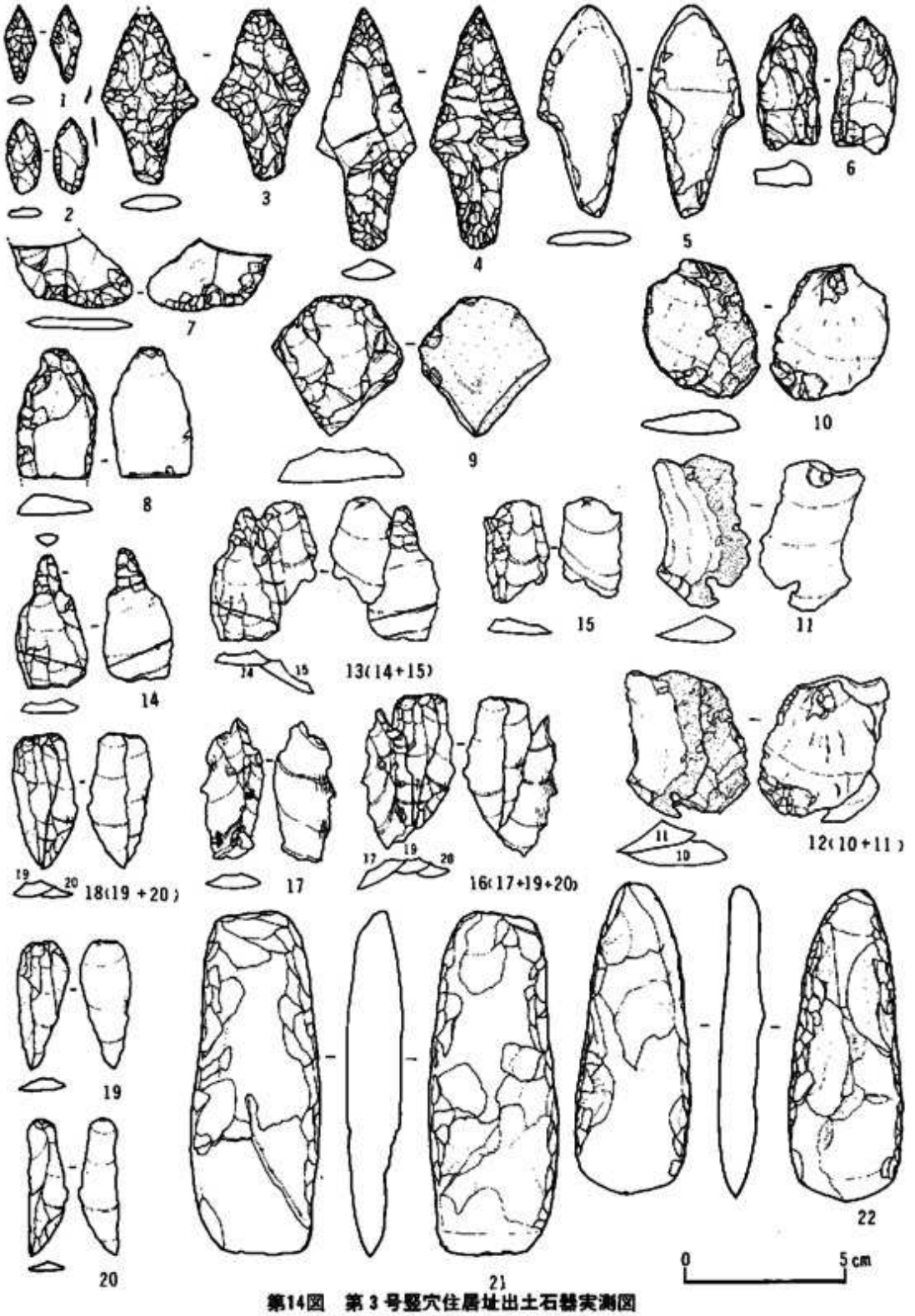
削器（6～8）　いずれも剥片のエッヂ部に細かな剥離加工を施し刃部としたものである。定形化されることなく、剥片の形に制約されている。

6は、厚手の縦長剥片の一側縁のエッヂに主剥離面より背の高い加工を施したものである。

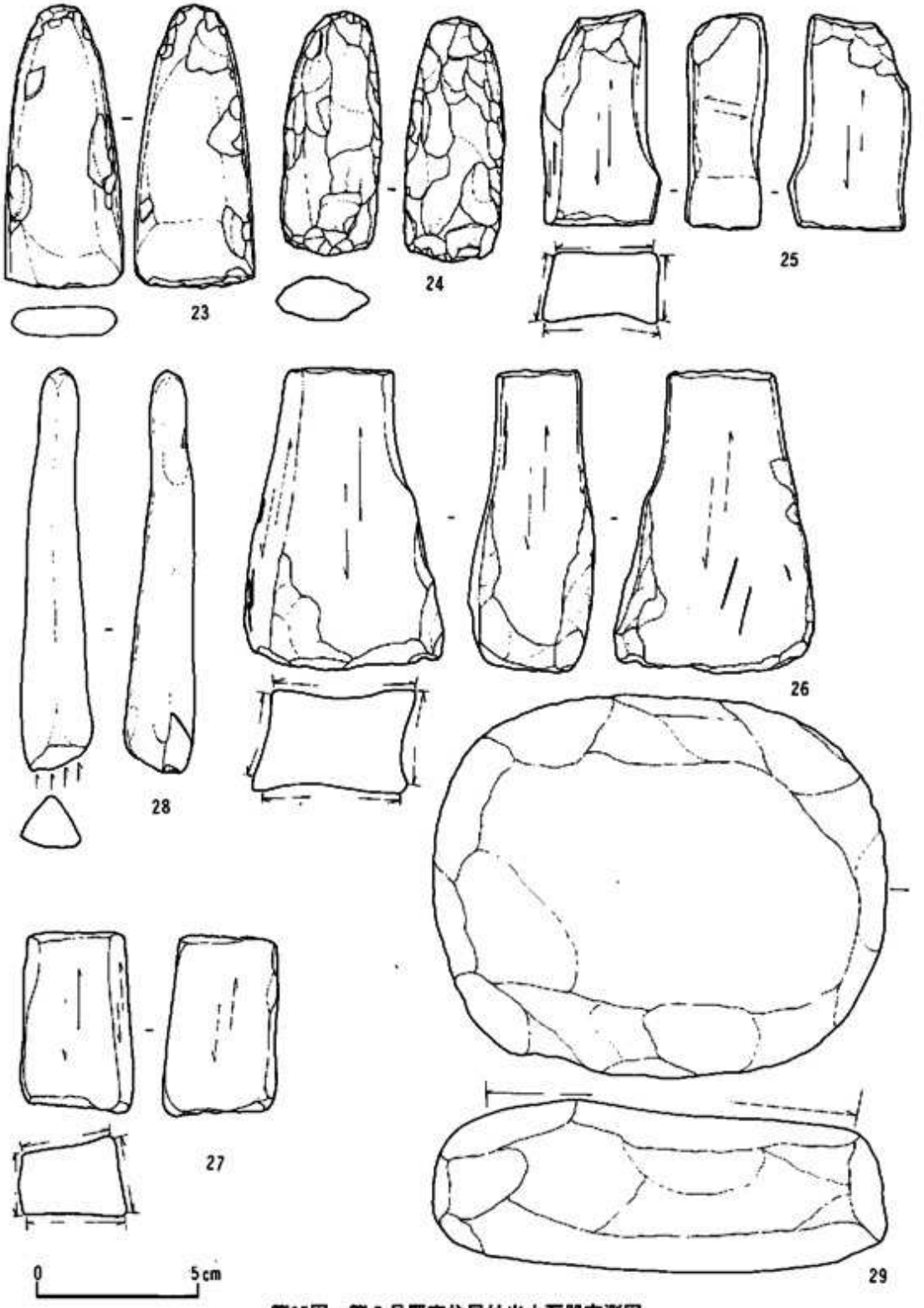
7は、幅広の剥片のエッヂ部に両面より細かな剥離加工を施し刃部としている。8は縦長剥片を素材とし、左右の両側縁のエッヂに主剥離面よりの加工を施し刃部としているものである。

石核（11）　偏平な小型の石核であり、2～3面の剥片を生産した面が残されている。

原石面のエッヂ部が打面と考えられ、エッヂは細かな剥離加工で整えられている。打面と剥離面の角度は狭く10°内外である。打面は原石面の平坦面をそのまま利用してあるため調整等は一切行われていない。



第14図　第3号竪穴住居址出土石器実測図



第15図　第３号竪穴住居址出土石器実測図

接合剥片（10～20）　石核より連続的に剥離された剥片が接合したものである。

12としたものは、2枚の剥片が接合したものでいずれも表皮を大きく残している。10にはエッヂ部に細かな剥離加工が施されており削器として使用されていたものと考えられる。11には一切の加工は施されていない。

13としたものは、やはり2枚の縦長剥片が接合したもので（14、15）ある。15には加工が一切施されてはいないが、14にはバルブ部分に石鏃の茎部のような状態に加工が施されている。当初は、石錐かとも考えられたが、刃部の断面形は、凸レンズ状を呈しさらにエッヂ部には磨滅痕がない点より、石鏃、銛先等の石器の製作途中のものと判断した。

16と図示したものは、17、19、20の3枚の縦長の石刃様剥片が接合したもので、各々の剥片には一切の加工痕が見られない。17、19、20の順序にて石核より剥離されたものである。

これらの接合する剥片類は、10～20まで個々の剥片を観察すると、いずれもクリスタバライトが点々と入っており、肉眼的には同一の石核から剥離されたものと考えられる。12、13、16は、相互に接合はしなかったが、表皮の残った状況等より考え、11が1番先に剥がされ、10→17→19→20→14→15の順序が考えられる。

石斧（21～24）　23は、刃部を欠損しており、24は、短冊状に素材を荒割し、一部のみ研磨した石斧の未成品であろう。他の2点は、いずれも両刃であり22は、丸味を帯びた刃部を有している。21～23の石斧は、側縁部に細かな敲打痕が残されており、全面にわたる入念な研磨加工が施されている。

砥石（25～27）　3点得られている。いずれも砂岩質で柱状をなしている。25、27は、小型で柱状を呈する。4面にわたる擦面が残されている。26も、一端がやや細くなるがやはり柱状を呈し大型である。やはり4面にわたる擦面が残されている。

いずれの資料も、研磨した方向に直交する断面形では中央部がくぼみコンケーブしている。

敲き石（28）　黒色片岩の棒状を呈する河原石であり、下端には細い敲打による表皮の剥脱がみられる。細味の石斧の素材であるかもしれないが、一応石器製作の際に用いられた調整具と考えた。

石皿（29）　小型の石皿で、安山岩を素材としている。周囲を敲打のくりかえしによって小判状に整形している。使用面は平坦であり、一面に敲打痕、擦痕がみられる。

第４号竪穴住居址（第16図)(図版３Ａ）

Ａ－Ⅳ区に位置しており、表土層剥土後の遺構確認面（黄褐色粘質土）にてその存在、プランが確認された。

本竪穴住居址は、道路予定地外にその９割があり、地主の方の許可を得て発掘区を拡張し発掘したものであるが、畑に植えられている作物等の関係より東側部分の壁の一部は調査されていない。

規模は、長径 5.5m、短径約 4.5m程であり、プランは、南側がややすぼまる楕円形に近い卵形を呈している。

長軸の方向は、北々東　南々西方向である。

壁高は、最大で遺構確認面より30cm程で、平均すると20cm程度であろうか。しかし東側の壁はこれ以上の拡張が許されていないため明らかにされていないが、床面の状況より、東部は序々に高まって行く傾向があり、壁面と床面が明確に区別されない皿状を呈する可能性も大きい。

壁、床面は、踏みかためられ非常に硬く、しっかりしている。床面の中央部には、浅い1.5×1.5m程の規模のくぼみがある。

床面南部分より床面中央のくぼみの東側にかけて不定形の粘土貼りが存在している厚さは、２～３cmである。

床面のほぼ中央には床面より若干浮いた状態で50×25cm程の焼土の集積があった。

また覆土中にも２ケ所より焼土の集積している部分が認められている。

床面の北東部壁沿には、３個の柱穴状小ピットがあり、西壁上にも同様に１個、北西側床面には、さらに細い小型の小ピットが２個検出されている。屋根等上屋の構築物をささえていた柱穴であろうと思われるがその構造等は明確にされてはいない。

埋土の状況は、下記に示めした。

第Ⅰ層：褐色土

第Ⅱ層：黒色土

第Ⅱ'層：黄褐色土粒がまじる黒色土

第Ⅲ層：炭が混る褐色土

第Ⅳ層：やや暗い黄褐色土

第Ⅴ層：茶褐色土

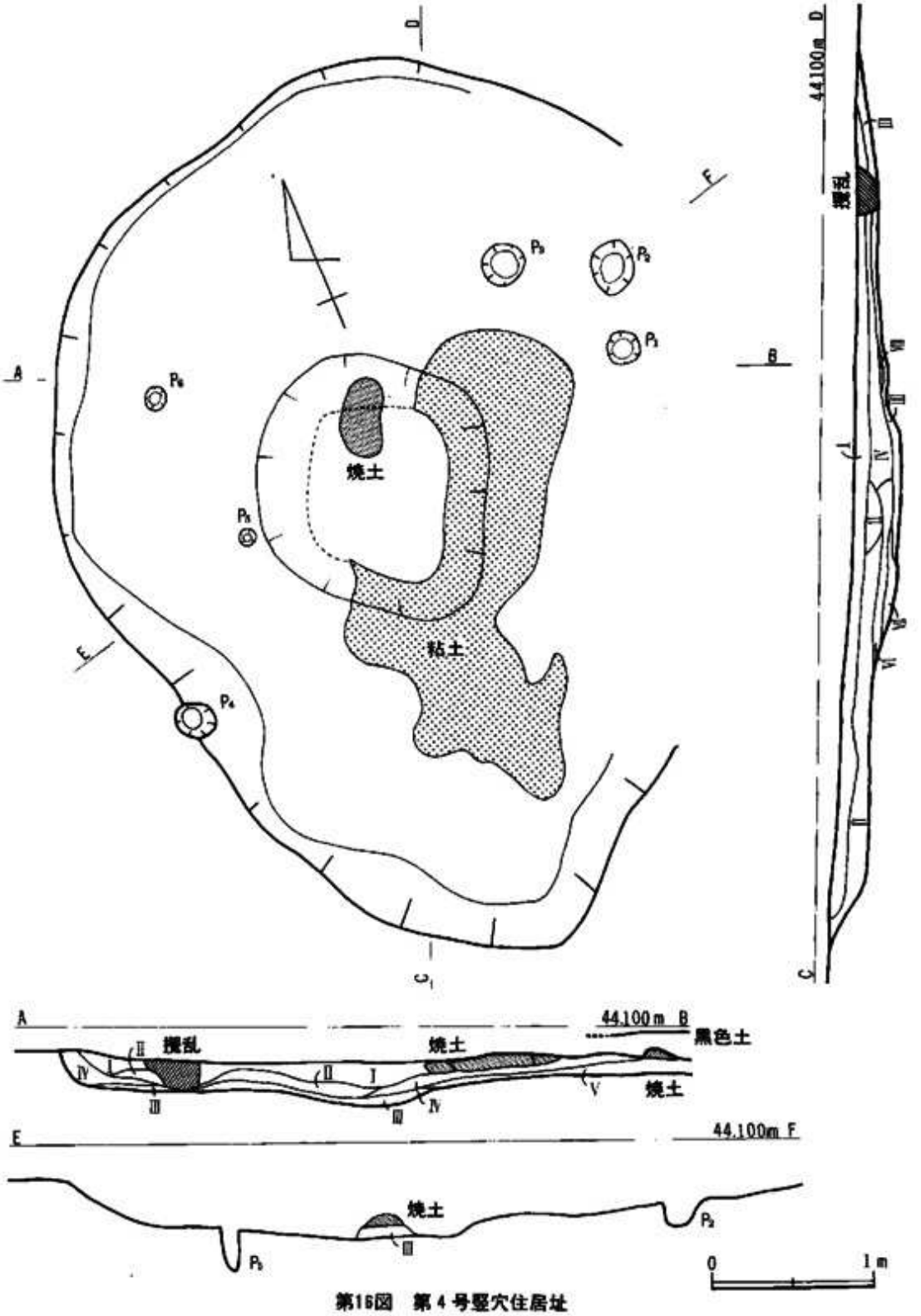
第Ⅵ層：淡黄褐色色粘質土（貼粘土）

第Ⅶ層：炭が混る褐色土

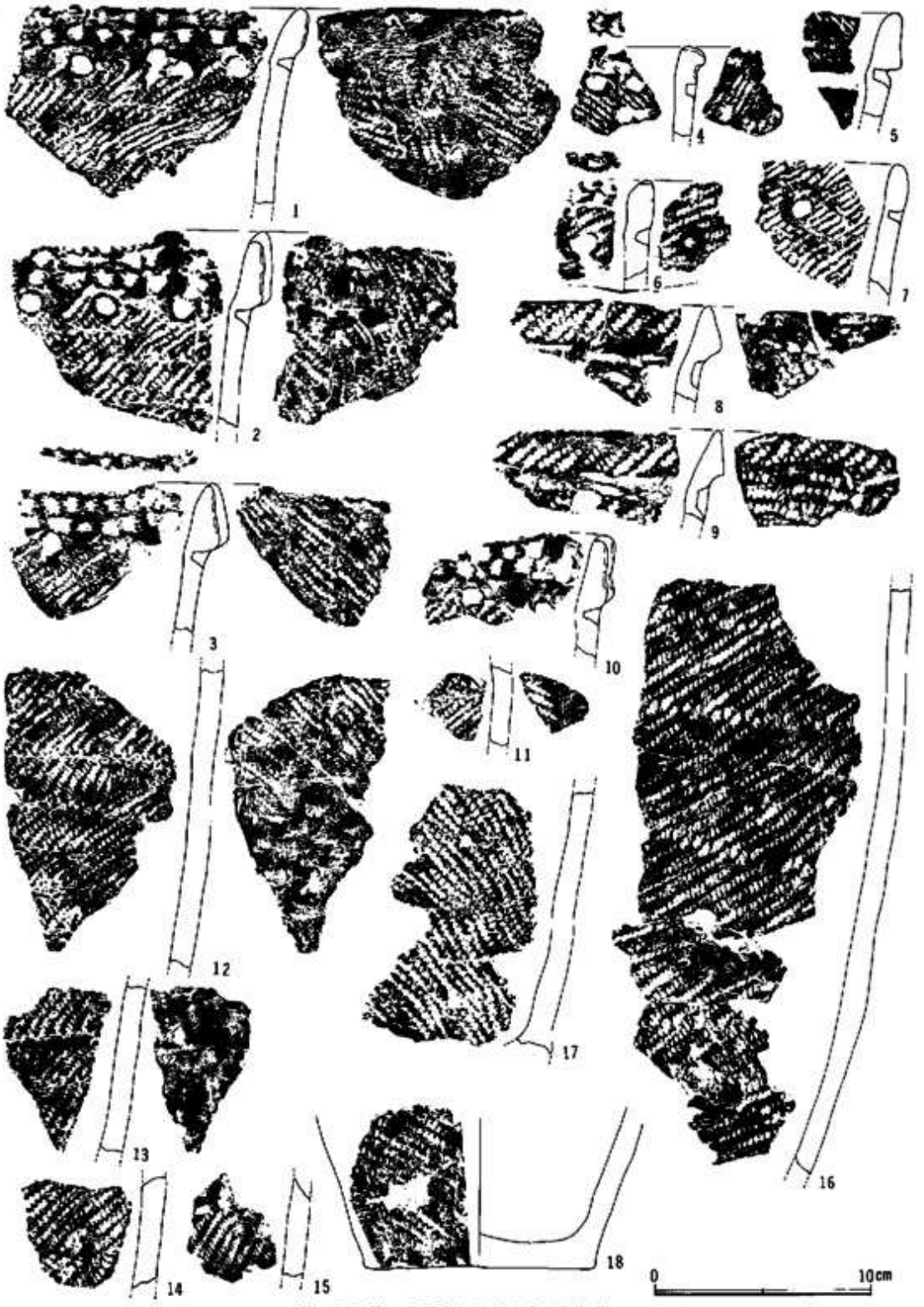
第Ⅷ層：黒色土のブロック

第４号竪穴住居址出土土器（第17図)(図版８Ｂ）

全例床面及び覆土中より出土したもので、口縁部にめぐる円形刺突文が特徴となる「トコロ６類土器」によって代表される土器群のみが得られている。



第16図　第4号竪穴住居址



第17図　第4号竪穴住居址出土土器拓影

口縁部がやや肥厚し、小突起が数個付けられている。口縁は、若干外反している。肥厚帯上に先端のささくれだったへら状工具を斜めに連続的に押し、引きした連続刺突文が2段施文される。さらに口唇上にも浅く同一の連続刺突文を一段施文する。

肥厚帯直下には、最大径 1.0cm程の円錐形に近い円形刺突文が 2.5cm間隔にめぐらされている。地文として一端に結束のある縄文原体を用いた左下りの綾くり文がある単節縄文が施文されている。また土器内面にも胴部に至るまで同一の縄文原体を口唇に平行に置き底部に向け回転施文させた綾くり文のある縄文を施文している（1～3、10～13）。

口縁部が若干肥厚し、口唇上と肥厚部に各1段のへら状工具の先端を斜めに押し引きした連続刺突文を施文する。肥厚帯下に直径8mm程の円形刺突文を 2.5cm 間隔にめぐらす。地文として右下りの無節縄文を施文し、さらに内面にも同一の縄文を施文してある（4）。

口縁部に肥厚帯を有し、やや外反し、断面形は三角形をなす。肥厚部と頸部が接する部位をへらにより区分している。地文として右下りの無節縄文が施文される（5）。

口縁は若干外反し、断面形は指頭状をなす。口唇上と口唇直下に半截竹管状工具の先端を斜めに連続的に押し引きした連続刺突文を各一段施文する。直径 2.5cm程の円形刺突文がその下位にめぐる。地文として左下りの単節縄文が施文され、内面にもなされる（5）。

口縁が若干外反し、断面形は丸味を帯びている。頸部に直径8mm程の円形刺突文がめぐり、地文として左下りの単節縄文が施文される（7）。

口縁部は若干肥厚し、やや外反する。断面形は、三角形状である。

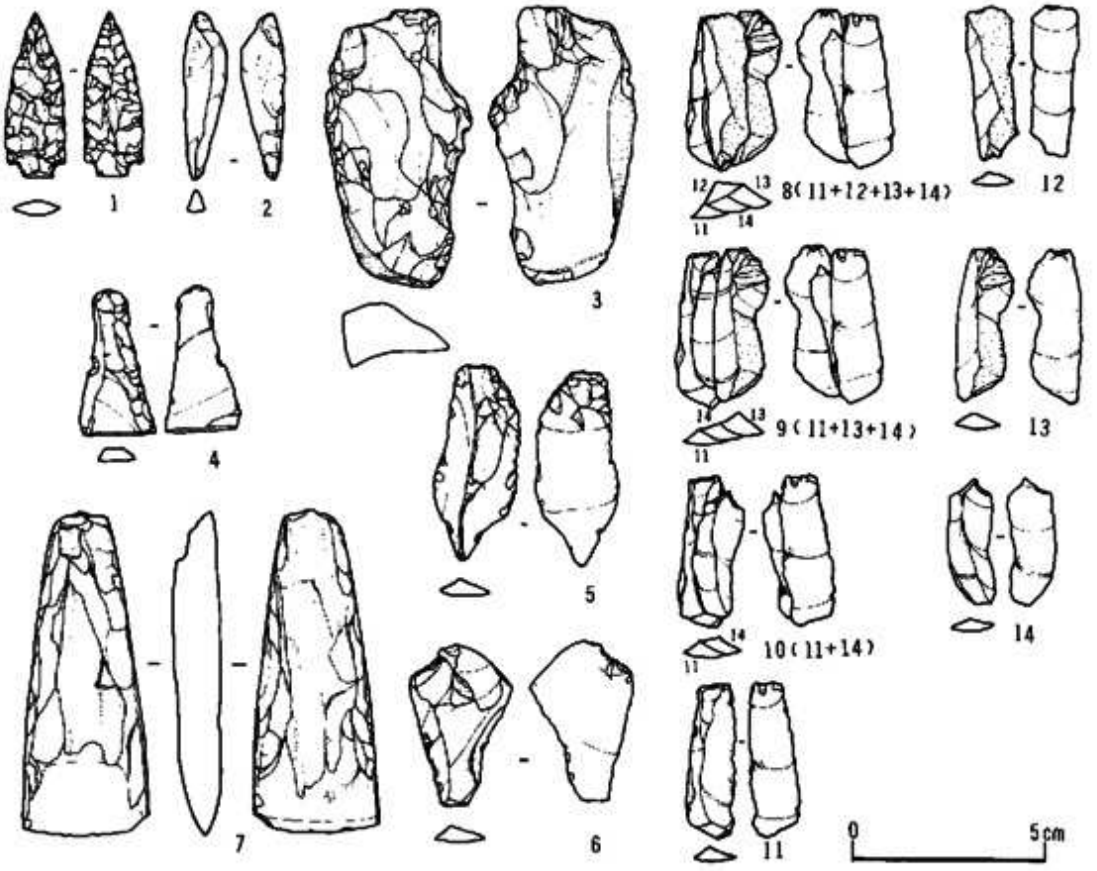
肥厚帯下に直径1cm程の先端の荒れた工具を使用した円形刺突文が浅く 2.5cm 間隔にめぐっている。地文として左下りの単節縄文が施文され、内面にも同様になされている（8、9）。

胴部の地文の状況は、左下りの単節縄文（14～16）であり、底部では、右下りの単節縄文のものが1個体ある（17、18）、底部形は、胴部より直に垂下し底面に至って断面形が「くの字」状を呈している。

胎土中には、全例砂粒を多く含んでおり中には小石まで混入されているものもある。さらに植物性繊維が混入された痕跡を有するもの（1～3、5、6、10～13、16）も多く存在している。

焼成は、比較的良好である。色調は、暗褐色で器面に炭化物を付着しているもの（1～13）が多く、他に褐色（14、16）、赤褐色（15、17、18）を呈するものがある。

器厚は、1.0～1.2cmである。



第18図　第４号竪穴住居址出土石器実測図

第４号竪穴住居址出土石器（第18図、19図）（図版11B、12B、13B）

数は非常に少ないが、４点の接合する縦長剥片が得られている。

石錐（１）　入念に両面加工が施されたもので、二等辺三角形状の刃部（尖頭部）が作出されている。さらに、やや太い茎部がある。

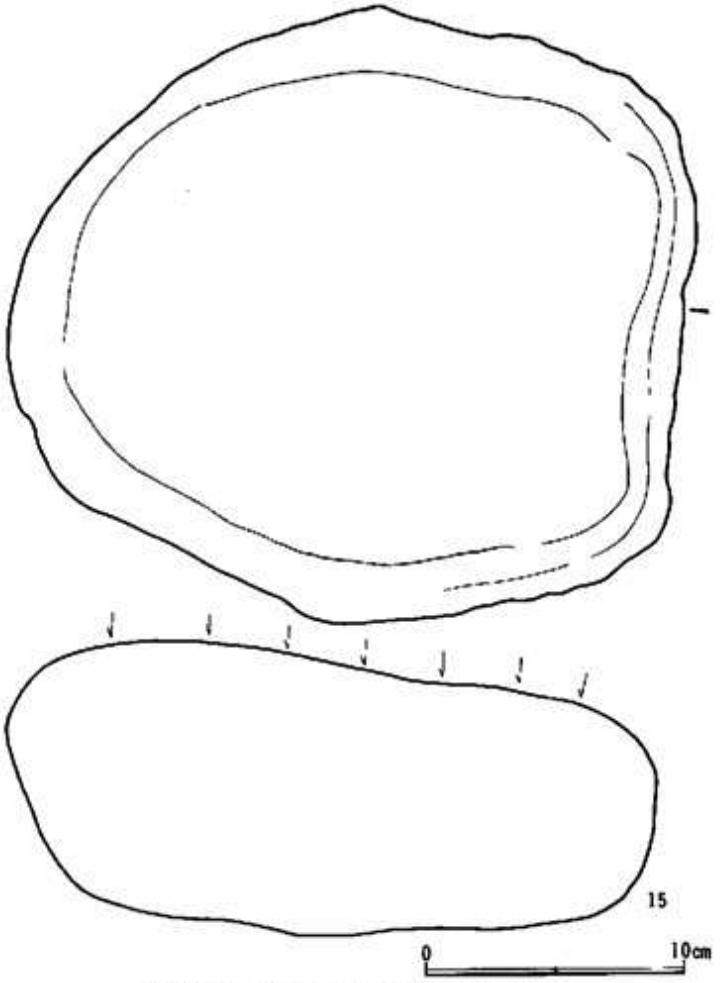
石錐（２）　硅岩製の断面形が三角形状をした剥片の下端に細かな剥離調整を施し刃部（尖頭部）としている。エッヂ部は、回転使用の為か丸味を帯び磨滅している。

削器（３、４）　３は、大型の剥片で原石面を打点として数枚の幅広剥片を連続的に取ったと思われる石核であり、鋭利なエッヂの一部に主剥離面から細かな剥離加工を施し、刃部としている、石核からの転用であろうか。４は、縦長剥片の左右両側縁のエッヂに主剥離面より剥離加工を施したものである。

縦長剥片（５、６）　いずれも石核より連続的に剥がされた縦長の石刃状を呈する剥片である。

石斧（７）　素材を短冊状に打ち欠き整形し、刃部のみ入念に両面より研磨した両刃の小型の石斧である。刃部は、直線的である。

接合縦長剥片（８～14）　図示した様に４枚の縦長剥片が接合したものである。いずれも縦長で



第19図　第4号竪穴住居址出土石器実測図

あり石刃様を呈している。同一の打面より連続的に剥離されている。打面の状態は、一切の調整が行われていない。14のみバルブ部分を欠損している。剥離の順序は、12→13→14→15である。

石皿（15）　大型のもので、やや平坦な部分を使用面とし、この部分には敲打痕、擦痕等が無数に観察される

第2節　Tピット

本遺跡からは、従来よりTピットと称され陥穴であったろうと考えられている楕円形の深いピットが10m呈の間隔を有し、並列し、2個発見されている。

第1号Tピット（第20図）（図版5A）

C　Ⅵ区に存在し、長軸方向をほぼ南ー北に向けている。

規模は、開壙部にて158×110cm、壙底面では96×36cm、深さは遺構確認面より最大で145cmある。

全体的な形状は、やや幅広な楕円形を呈しており、壙底面中央よりやや南側に直径6cm程の柱穴状小ピットがある。

長軸の断面形は、開壙部がやや広がり壙底部に向けほぼ垂直に壁面が下がり、壙底面近くになるとやや丸味を帯び壙底面へと至っている。

短軸の断面形は、開壙部が広く壙底部に近くなるにつれ序々に狭くなって行く。

壙底面の状態は、短軸方向に丸味を帯びたほぼ平坦となる。

壙底面にて検出された柱穴状小ピットは、深さ13cm程度であり先細りとなっている。

埋土の層序は、下記の通りである。

第Ⅰ層：黒色土

第Ⅱ層：暗茶褐色土

第Ⅲ層：黄褐色土粒を含む暗褐色土

第Ⅳ層：黄褐色粘質土

第Ⅴ層：黄褐色砂質土

第Ⅵ層：黄褐色粘質土

第Ⅶ層：黒色土

第Ⅷ層：暗黄褐色砂質土層

ピットの壁面より観察される地山の層序は、

第1層：暗黄褐色粘質土

第2層：黄褐色粘質土

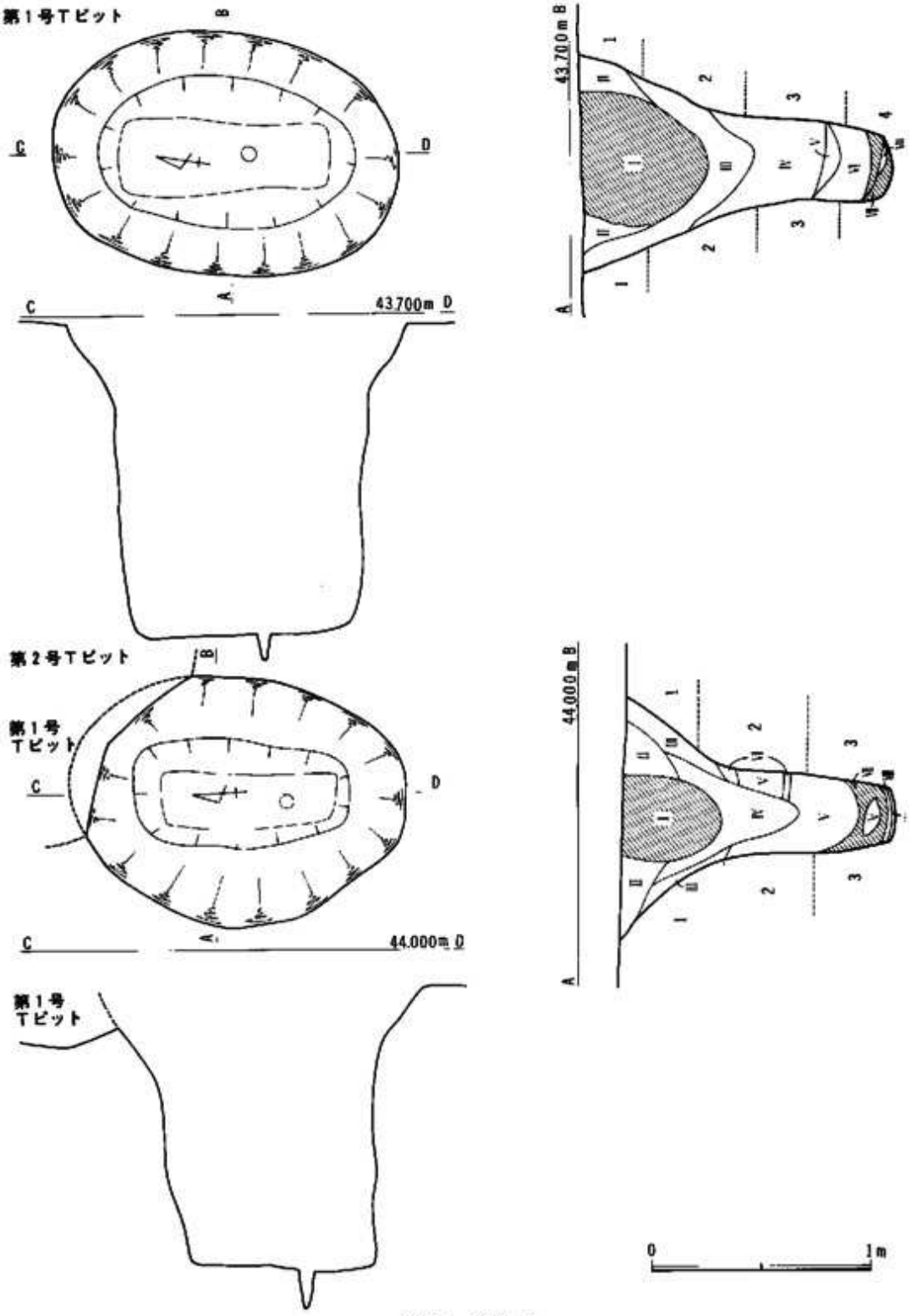
第3層：淡黄褐色砂質土

第4層：灰白色火山灰砂

第2号Tピット（第20図）（図版5B）

第1号Tピットと約10m程はなれ、並列して、B－Ⅴ区に存在している。尚北側の一部を第1号ピットにて切られており、第1号ピットとの新旧は、本ピットが古い事が調査時に確認されている。本ピットの長軸方向は、第1号Tピットとほぼ同様の南ー北方向である。

規模は、開壙部にて152×115cm、壙底部で80×25cm、深さは遺構確認面より最大で130cmを算す


第1号Tピット
A
B
C
D
43.700m
43.700m B
第2号Tピット
第1号
Tピット
44.000m
44.000m B
0
1m

第20図　Tピット

る。

全体的な形状は、楕円形を呈している、壙底面中央の南側に直径6cm程の柱穴状小ピットが発見されている。

長軸の断面形は、開壙部が広がり、30～40cm程下がると垂直に近く壙底部へ落ち込み、さらに若干オーバーハングしながら、壙底面へと接している。

短軸の断面形は、開壙部が広がり、さらに下ると垂直に近い壁となり序々に幅を狭め、壙底面へと至っている。

壙底面は、隅丸長方形のプランを有し、平坦である。

壙底面より検出された柱穴状小ピットは、深さ18cm程あり、先細りとなっている。

埋土の層序は、下記の通りである。

第Ⅰ層：黒色土

第Ⅱ層：硬い暗茶褐色粘質土

第Ⅲ層：茶褐色粘質土

第Ⅳ層：暗褐色土

第Ⅴ層：黄褐色砂質土

第Ⅵ層：茶褐色土

第Ⅶ層：黒色土

第Ⅷ層：灰白色火山灰砂

第Ⅸ層：暗褐色土

ピットの壁面より観察された地山の層序は、

第1層：黄褐色粘質土（地表近くが暗く、深くなるにつれ明るい色調となる。）

第2層：淡黄褐色砂質土

第3層：灰白色火山灰砂

第2号Tピット出土土器（第26図、23)(図版9B）

1片の土器片が第Ⅲ層中より出土したのみであるが、本ピットに伴ったものとは断定できない。

比較的厚手の土器で器面が磨滅し荒れている。単節の右下りの縄文が観察される胴部の破片である。器厚は、1～1.2cmあり、胎土中には、砂粒と若干の繊維が混入されていた痕跡がある。色調は黄褐色を呈する。本遺跡より単一に得られている縄文時代中期「トコロ6類土器」に類するものと思われる資料である。

第3節　ピット

第1号ピット（第21図）

B－V区に存在し、規模は開壙部にて 160 × 80cmの長楕円形のプランを呈し、深さは遺構確認面より15cm内外と、浅いピットである。

長軸方向は、北西　南東方向であり、南西壁部で第2号Tピットを一部切って掘り込まれている。

壁は、やや硬くなだらかに傾斜しており、比較的平坦な壙底面へと接していく。しかし、北西部分の壙底部に至っては、若干掘り込まれており、丸味を帯びた断面形となっている。

遺物は、覆土中に多く含まれている。

本ピットの性格については、明確にされてはいない。

埋土の層序は、下記に示めした。

第I層：黒色土

第II層：褐色土

第II'層：黄褐土が若干まじる褐色土

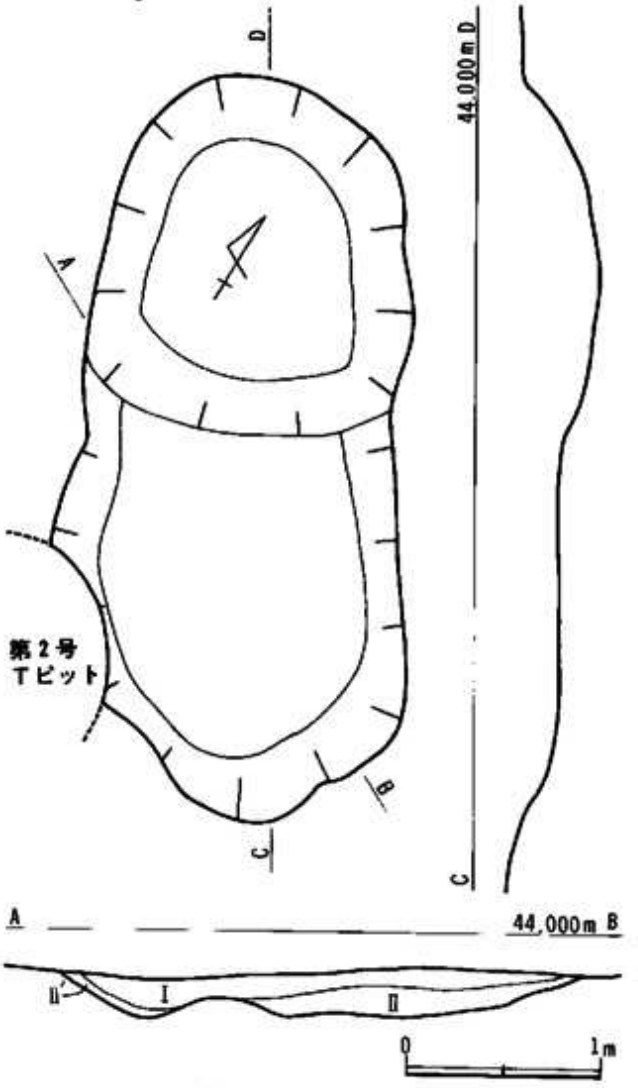
第1号ピット出土土器（第11図、第22図）（図版6、9A）

全例比較的厚手であり、口縁部が肥厚し、肥厚帯下に円形刺突文が1～2cm間隔でめぐるといった特徴を有する。いわゆる「トコロ6類土器」によって代表される土器群が単一的に検出されている。

口縁部が肥厚し、肥厚帯直下に円形刺突文が1～2cm間隔でめぐっているものが全てである。

口唇部の断面形は、ほとんどが指頭状をなすが、口唇上にも縄文を施文する例（1）、棒状の刺突具にて刺突文をくりかえしめぐらすもの（2）、へら状の工具の先端を使用する連続刺突文を施文するもの（4）等がある。

口縁部が肥厚するとともに、対になったいくつかの小突起を有する例（2）もみられる。



第21図　第1号ピット

さらに口縁部の内面にも、器面に施文されている縄文と同一もしくは同種の縄文原体を使用して縄文を施文する例（1～3）も多くみられる。

肥厚帯上は、胴部等と同様に地文としての縄文にておおわれている例がほとんどであるがへら状工具の先端による連続刺突文が一段めぐっている例（5）もある。

胴部及び口縁部の地文としての縄文は、右下りの単節縄文（2、4、5、8、11、15）、左下りの単節縄文（第11図2、1、3、7、9、10、12～14、17、20）、羽状縄文（6）、右下りの無節縄文（16、18）等である。さらには、6のように地文としての羽状縄文の上にやや幅広のへら状工具による沈線文が施文される例もある。

底部の形状は、平底であり、底面が外側に若干張り出すもの（19）と、胴部より底面にかけ真直に下り「くの字」状となるもの（20）の2種があるようである。

土器の胎土中には、多くの砂粒が混入されており、さらにかなり大粒の小石までが混入されているものが多くみられる。

また植物性繊維を胎土中に混入したと考えられる痕跡を有するものも多くみられる（1～3、6、9、13、16～20）。

焼成は比較的良好であり、色調も黄褐色を呈するものがもっとも多く（7～12、17～20）。さらに暗褐色（1、3、4、14～16）、赤褐色（2、5、6、13、15）を呈しているもの等がある。

器厚は、1.0～1.2cm程度である。

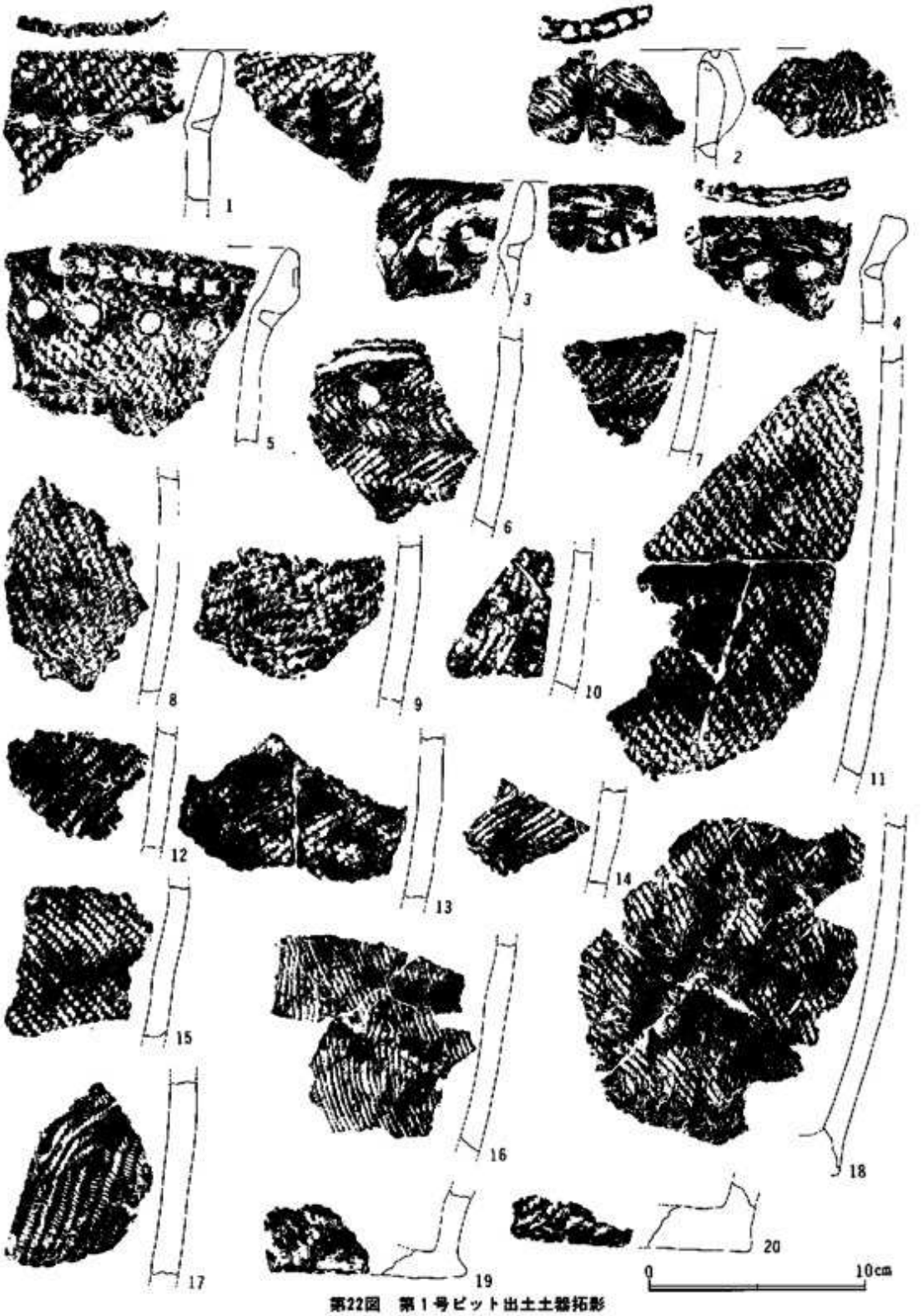
さらに、第11図に図示した復元された土器がある。底径12cm、現存高15cm程の底部である。器形は、円筒形であり形は、胴部より垂下し底面に至って「くの字」状をなす。

器面には、左下りの単節縄文が地文として施文されている。

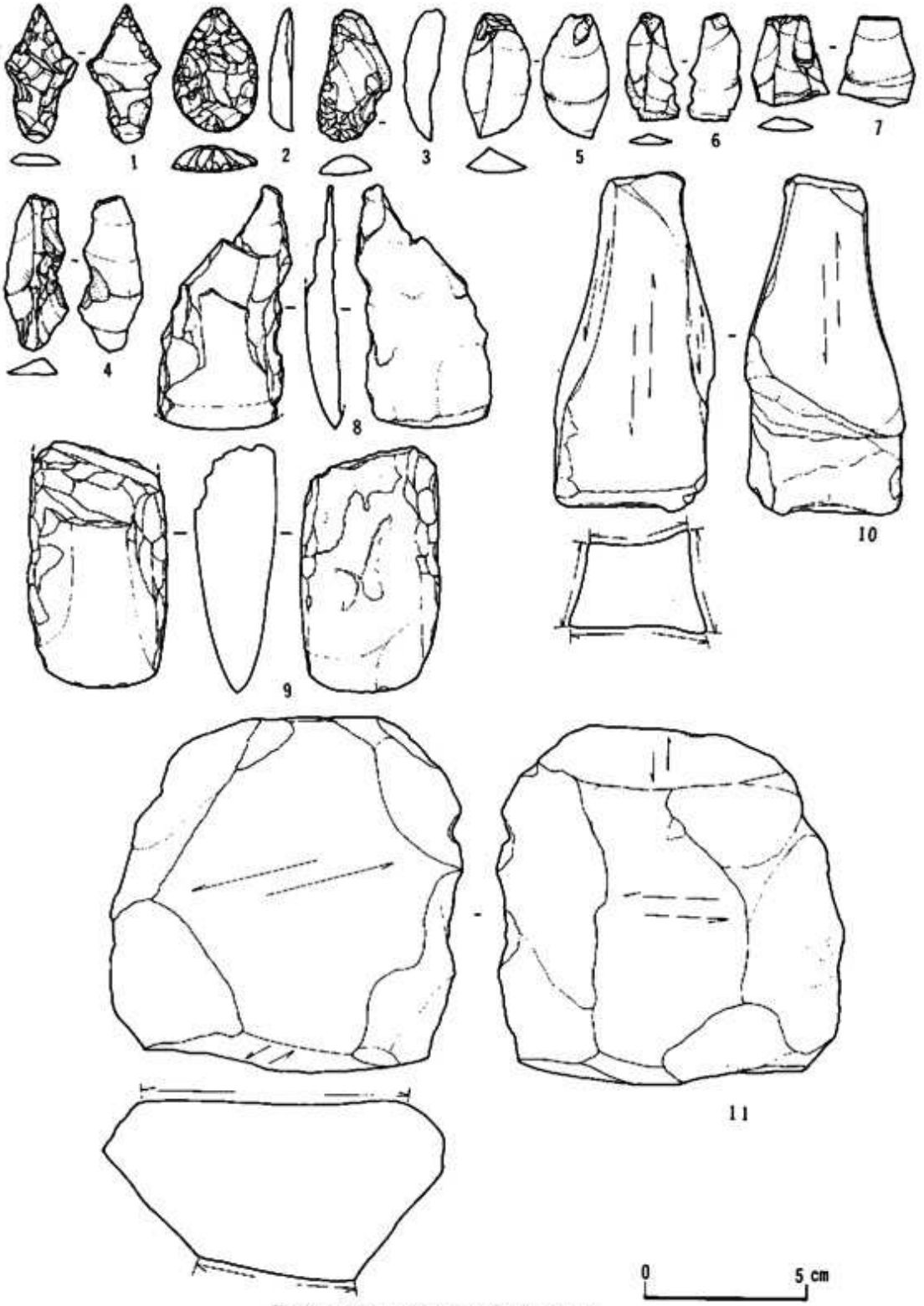
胎土中には、多量の砂粒が混入されさらにはかなり大粒の小石までが混入されている。そして若干の、植物性繊維が混入されていた痕跡を有している。

焼成は、比較的良好であり、黄褐色の色調を呈している。

器厚は、1.2cm内外である。



第22図　第1号ピット出土土器拓影



第23図　第１号ピット出土石器実測図

第1号ピット出土石器（第23図)(図版14)

総数は少ないが、剥片等は多く比較的まとまりをもっているものと考えられる。

石鏃先（1）　縦長剥片のエッヂに加工を施し刃部（尖頭部）と柄部を作出してある。刃部は三角形となり左右は対称形となる。柄部は太く、舌状となっている。主剥離面は大きく残されており、柄部とエッヂのみ細かな加工がみられる。

掻器（2、3）比較的厚手の縦長剥片の下端部を中心として主剥離面より背の高い剥離面を作る加工の施こしてあるものである。2は、全周に、3は、下部のみに刃部がある。エンドスクレパー、ラウンドスクレパーと称されるものである。主剥離面には一切の加工は施されず、主剥離面のエッジ近くの部分には、若干の磨滅痕があり、使用痕かとも考えられる。

削器（4）　縦長剥片の右側エッヂに若干の加工があるものである。

縦長剥片（5～7）　いずれも黒曜石であり母岩（石核）より連続的に生産された縦長の形状を有する剥片である。いずれも主剥離面には、バルブ面を残している。エッヂ等にも再加工は一切なされていない。いずれも剥片石器の素材であろう。

石斧（8、9）　いずれも中型のもので破損している。2点とも両刃である。8は、背面が刃部を若干残して剥脱しており左右両側も大きく破損している。9は、頭部が折れ欠損した資料である。

砥石（10、11）　2点ともいずれも砂岩であり、10は、角柱状をなし、4面にわたる擦面が観察される。研磨する方向と直交する断面形は、中央部がくぼんでコンケーブしている。11は、大型のもので4面にわたる平坦な面が擦面となり、10と同様に研磨された方向と直交する断面にて中央部がくぼんでいる。

第４節　石屑廃棄所（第３図）

Ｂ－Ⅳ区、第２号竪穴住居址の西側部分に接するように、基盤の黄褐色粘質土（遺構確認面）が若干汚れた状態の部分直径約 3.5cmの範囲に黒曜石の１cm以下の小破片が集中してみられる部分があった（第３図斜線部分）。

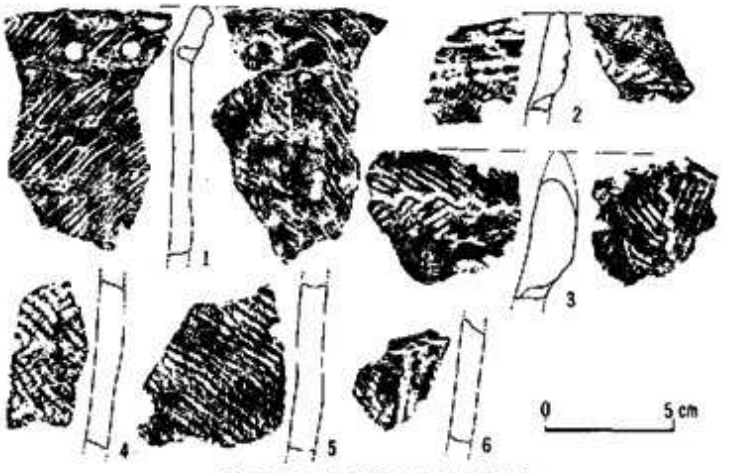
プランは、円形に近く、皿状よりさらに浅いピット状を呈すると考えられるが、壁、床面とも軟弱であり、人為的に構築されたというより自然地形での浅いくぼ地のような感じであった。

石屑が集中して発見される部分に接する第２号竪穴住居址を含め、隣接する地域には４軒の竪穴住居址がある。これらの竪穴住居址内よりは、各種の石器群が検出されており剥片類も多い。第３号竪穴住居址では、前述して来たが、石核、接合する剥片、さらに石器未成品がかたまって出土している。第４号竪穴住居址においても４片の縦長剥片が接合される等、各種の石器類を各竪穴住居址内で製作していたと考えられる資料がみつかっている。

これら竪穴住居址群に隣接してある石屑の集中して発見される部分は、自然のくぼみを利用した石屑あるいは、破損した土器等の廃棄所として使用されたものではないかと考えられよう。

石屑廃棄所出土土器（第24図）（図版９Ｂ）

数多くは出土していないが、全例「トコロ６類土器」によって代表される土器群である。



第24図　石屑廃棄所出土土器拓影

口縁部がやや外反し直径８mm内外の円形刺突文が2cm間隔でめぐる。地文として左下りの単節縄文が施文され、さらに内面にも同一の縄文原体を使用しての縄文が施文されるもの（１）。口縁に肥厚帯を有し、肥厚帯上には、半截竹管状工具の内側を連続して押し付けた連続刺突文が２段めぐり、さらに土器内面にも縄文を施文するもの（２）もある。３は、口縁が肥厚し、さらに小突起がある例である。器面及び内面には同一の縄文原体を使用した綾くり文を有する羽状縄文が施文され地文となっている。４、５、６は、胴部破片でありいずれも厚手であり４は羽状縄文、５、６は単節の縄文が地文として施文されている。焼成は、全例とも比較的良好であり、色調は、黄褐色（６）、暗茶褐色（２、５）、赤褐色（１、３、４）等を呈している。胎土中には、全例多量の砂粒及び小石を混入してあり、さらに植物性繊維の混入されていた痕跡を有するもの（１、３～５）もある。

器厚は、0.6cm～1.0cm程度である。

石屑廃棄所出土石器及び剝片（第25図）（図版14）

両面加工の石器（1、2）　1は厚手の剝片を素材に入念な両面加工の施された石器で削器、ナイフ状石器に相当する用途が考えられる。2は基部のみの破片で、入念に両面加工が施される木の葉状を呈するナイフ状石器の破損品であろう資料である。

削器（4）　縦長剝片の一側縁のエッヂ部に加工を施し刃部を作出したものである。

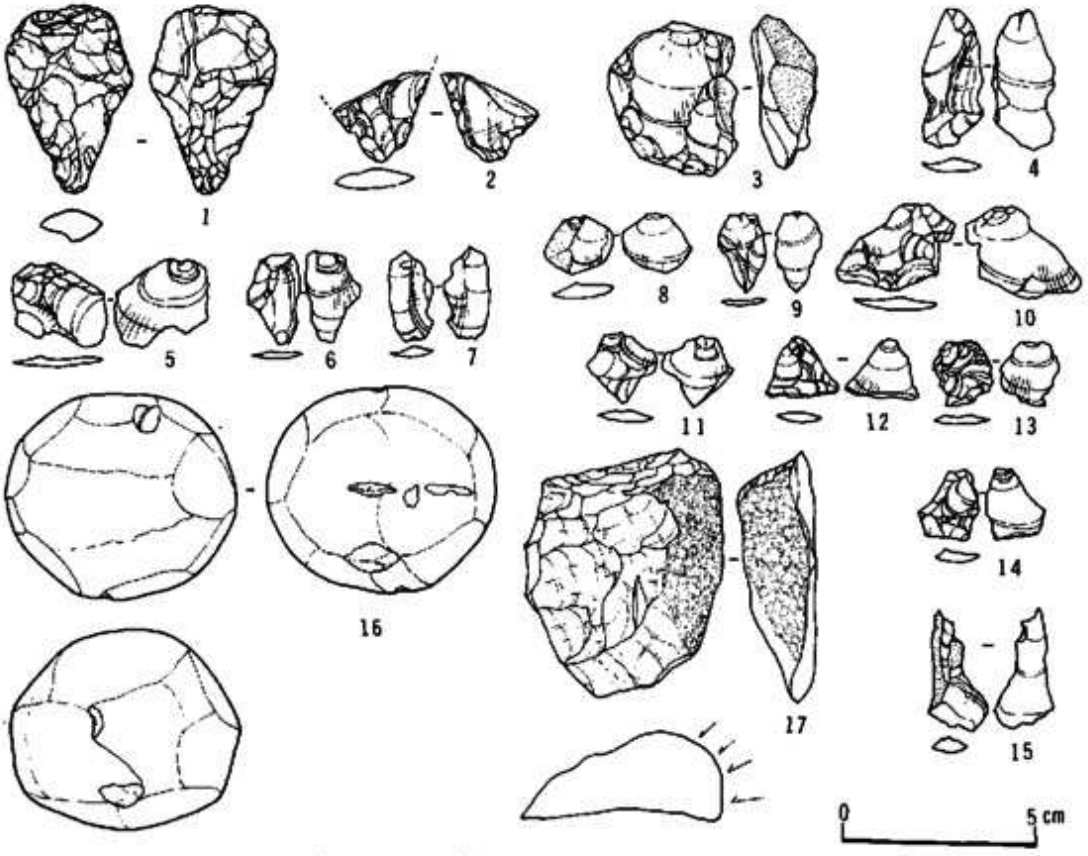
石核（3）　偏平な石核であり2面以上の縦長剝片を生産した痕跡を有している、打面は、原石面の平坦な面を利用し、打面調整等は一切行われていない。打面と剝離面の角度は30°内外である。

剝片（5～15）　いずれも小剝片（チップ）であるが、縦長のもの（6、7、9、14、15）、幅広で貝殻状をなすもの（5、8、10～13）の2類に分類される。

幅広で貝殻状を呈する小剝片あるいは、縦長小剝片は、両面加工の石器を製作に行われる押圧剝離等の際の剝脱される剝片かとも考えられよう。

敲き石（16、17）　16は、緑色片岩の球状の円礫で球面上に細かな敲打痕がいたる所にみられる。

17は、緑色片岩であり、石斧等として製作途中に破損したものを敲き石として再使用したものと考えられ、一部に細かな敲打によるつぶれが面をなして存在している。



第25図　石屑廃棄所出土石器及び剝片実測図

第５章　発掘区出土の遺物

発掘区よりも若干の遺物が得られているが、遺構、特に竪穴住居址より得られたものより数量的におとる。

尚、遺構確認面（黄褐色土）の上面にまで永年にわたる耕作の爪跡が残されており、層位的な裏付けを有する遺物ではない。

しかし、土器は、遺構内より検出されたものと同様に口縁部にめぐる円形刺突文が特徴となる「トコロ６類土器」によって代表される土器群が全てであり、石器も、同様にこれらの土器群に単一的に伴出したと考えてさしつかえないものである。

第１節　土器（第26・27図）（図版10ＡＢ）

口縁部が若干肥厚し、山型の小突起が付く。口縁はやや外反する。肥厚帯下には直径 1.0cm 程の半截竹管状工具による円形刺突文が 1.5cm 程の間隔にて施文されめぐっている。口縁部は、無文であり胴部に左下りの単節縄文が地文として施文されている（１）。

口縁部が肥厚し、やや外反しており、断面形は三角形状をなす。肥厚帯直下には直径４mm～８mm程の小円形刺突文が、2cm 間隔でめぐっている。肥厚帯上及び器面さらには内面にも地文として左下りの単節縄文が施文される（２、５）。

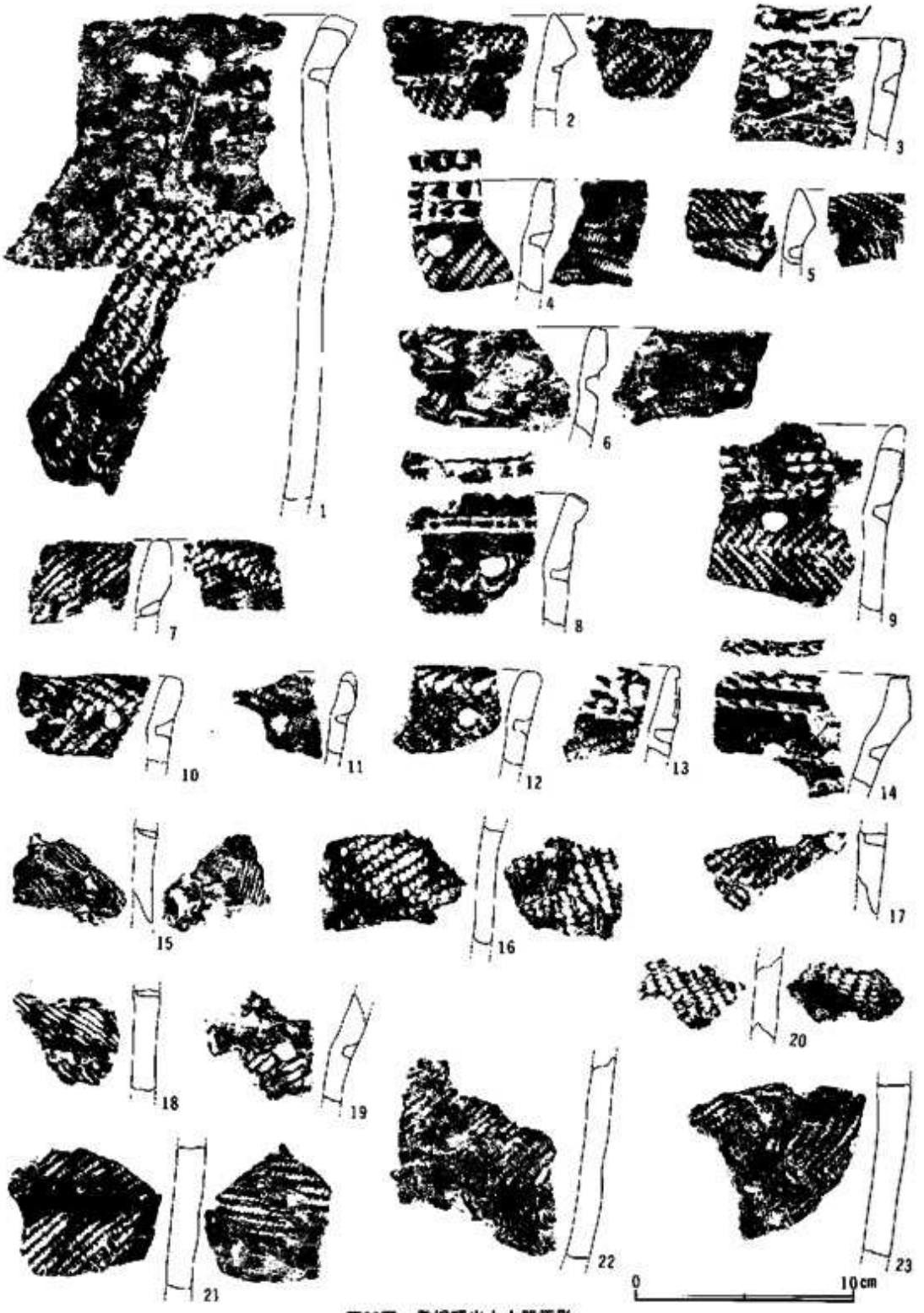
口唇上に一段、口縁部に二段半截竹管状工具の先端内面を斜めに連続して押し引きした連続刺突文がある。口縁は、若干外反する。連続刺突文下には、直径 1.0cm程の円形刺突文がめぐり、地文として無節の撚糸を棒状の工具にコイル状に巻き付けた絡縄体を回転施文させた撚糸文を交差させた網代文を地文としている（３）。

口縁部が若干肥厚し、やや外反する。肥厚帯上に２段、口唇上に１段若干先端が内湾したへら状工具を斜めに連続的に押し、引きした連続刺突文が２段施文される。肥厚帯下には直径1cm 内外の円形刺突文があり、地文として左下りの単節縄文が、内面にまで施文される（４）。

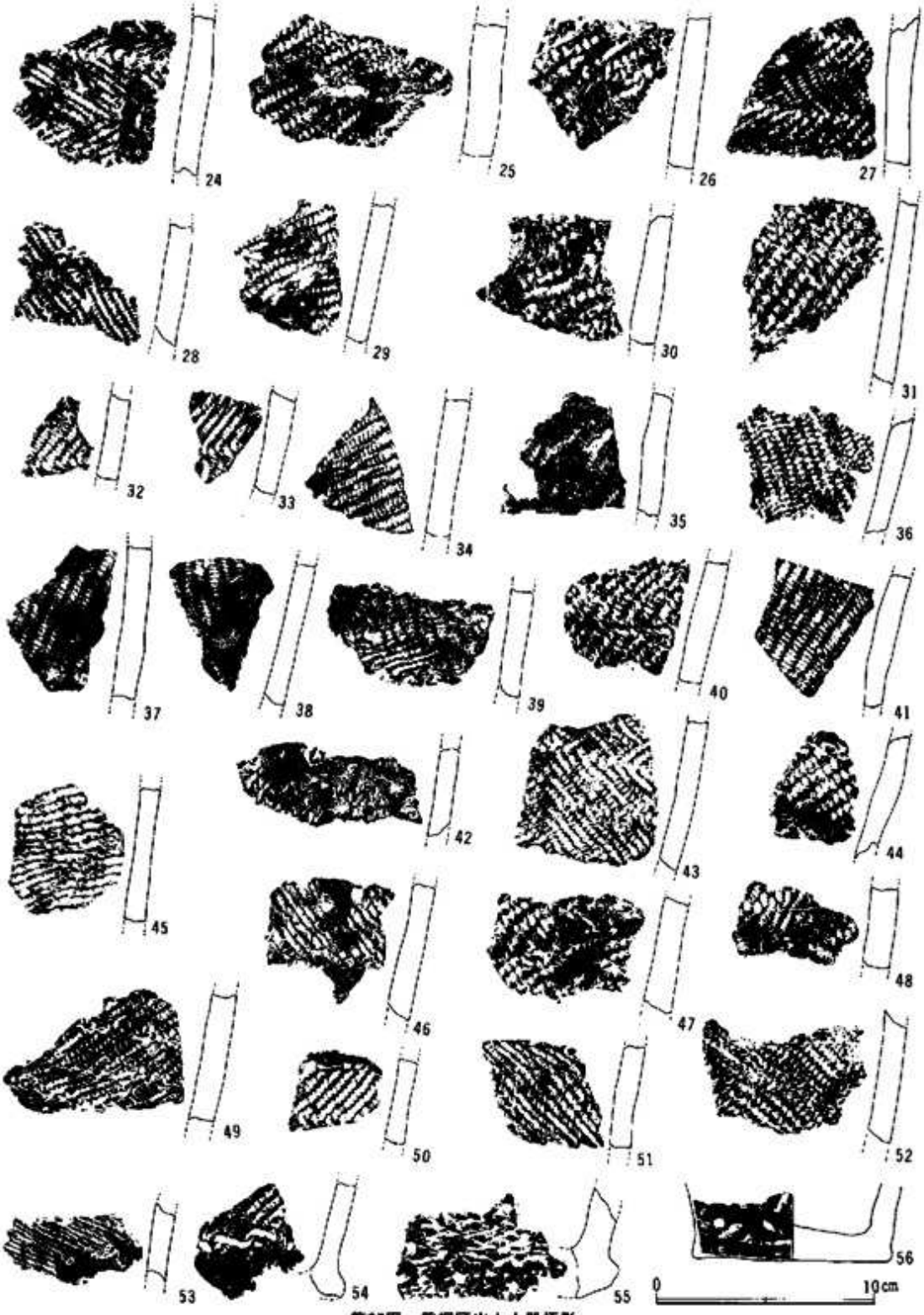
口縁部が若干肥厚し、やや外反する。肥厚帯下に円形刺突文がめぐる。地文として左下りの単節縄文を内面にまで施文する（６、７）。

口縁部が若干肥厚し、やや外反している。口唇上、肥厚帯上に各一段半截竹管状工具の内面先端を斜めに連続して、押し引きした沈線状の連続刺突文を施文する。肥厚帯下には、直径 1.2cm 程の半截竹管状工具による刺突文がめぐる。地文として綾くり文のある右下りの単節縄文が施文される（８）。

口縁部は若干肥厚し、やや外反する。さらに山型の小突起が付く、肥厚帯下に２段半截竹管状工具の内面先端を斜めに連続して押し引きした連続刺突文があり、その下位に直径１cm程の円形刺突文が２cm間隔でめぐっている。地文として羽状縄文が施文される（９）。



第26図　発掘区出土土器拓影



第27図　発掘区出土土器拓影

やや外反する平らな口唇部をもつ口縁を有し、円形刺突文をめぐらす。地文として、羽状縄文が施文される（10、12）。

外反する口縁部で、小突起を有する。円形刺突文がめぐらされ、地文として右下りの単節縄文が施文される（11）。

口縁部に肥厚帯を有し、やや外反する、断面形は三角形を呈している。口唇上に1段肥厚帯上に2段半截竹管状工具の先端部内面を連続して斜めに押し引きした連続刺突文が施文される（14）。口唇上には無い（13）、地文として左下りの単節縄文が施文される。

15、17、18、19は、口縁部を欠いたもので円形刺突文のみみられるものである。

無節の右下り縄文が地文となるもの（15、18）。15は、内面にも施文されている。

左下りの単節縄文が地文となる（19）。

羽状縄文が地文となる（17）。

16、21は、内面にも縄文が施文される胴部片である。いずれも左下りの単節縄文を地文としている。

胴部での地文の状況は、右下りの無節縄文（46、51、53）、左下りの無節縄文（42、45）、右下りの単節縄文（28、36、38、52）、左下りの単節縄文（22、25、26、29～31、34、35、37、40、41、44、47～49）。49のみ綾くり文、　羽状縄文（24、27、32、33、39、43、50）等がみられる。

底部の形態は、底面のやや張り出すもの（54、55）と、「くの字」状となるもの（56）の2種がみられる。

胎土中には、全て砂粒を含み、さらに小石まで混入しているものもある。植物性繊維を混入した痕跡を有するもの（1、2、5～10、12～17、19～22、26～29、31、32、34、36、39、40、42、44、46～49、54）が非常に多く大部分を示めている。

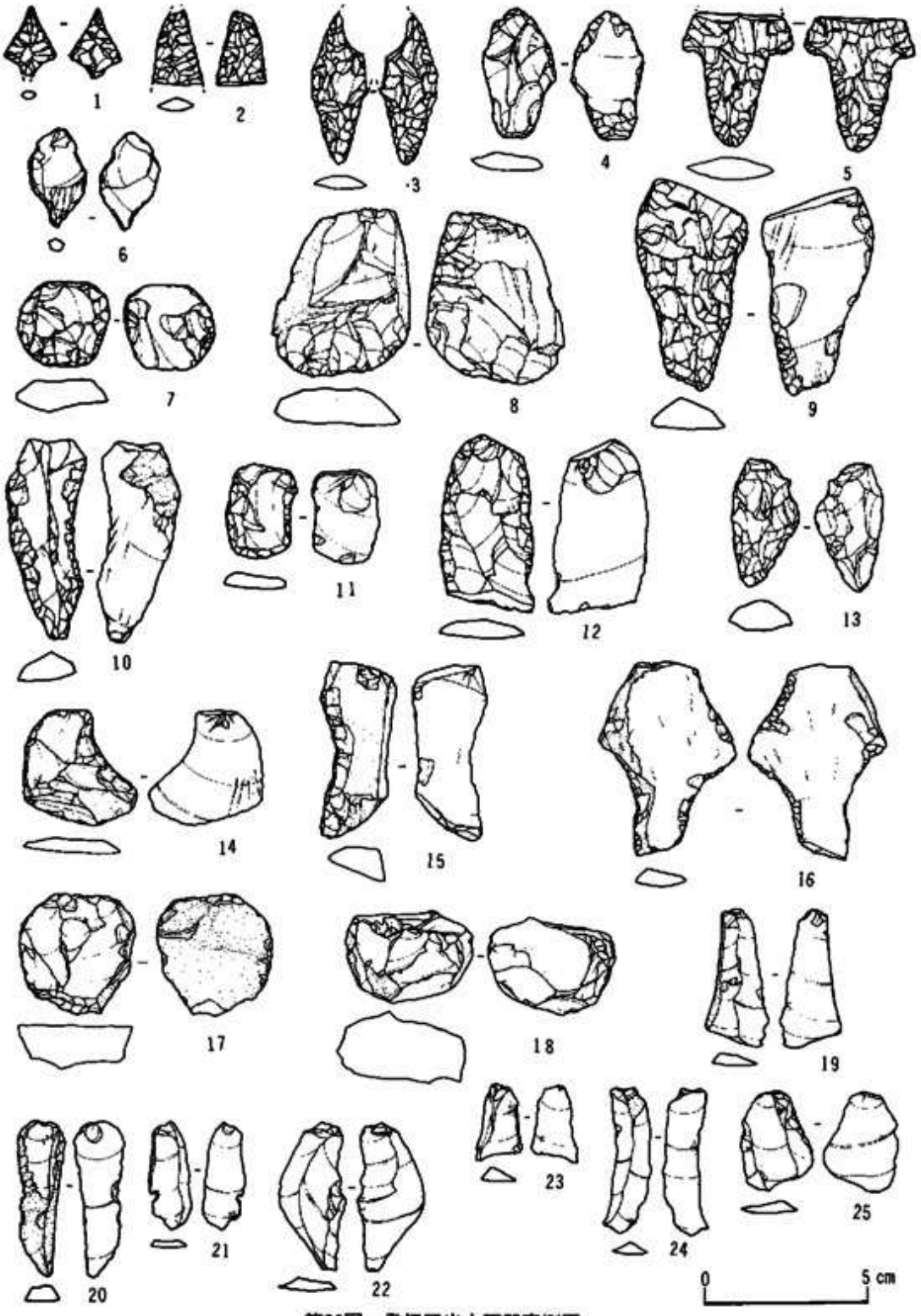
焼成は比較的良好であり、色調は、暗褐色（1、3、5、8～10、12、14、16、28、29、31～34、39、45、46、53）、褐色（2、20、26、27、30、49）、赤褐色（4、6、11、15、19、35、37、43、50、51、54）、黄褐色（7、13、17、18、21、22、24、25、36、40～42、44、47、48、52、55、56）等を呈している。器厚は、1.0～1.5cm程である。

第2節　石器（第28・29・30図）（図版15）

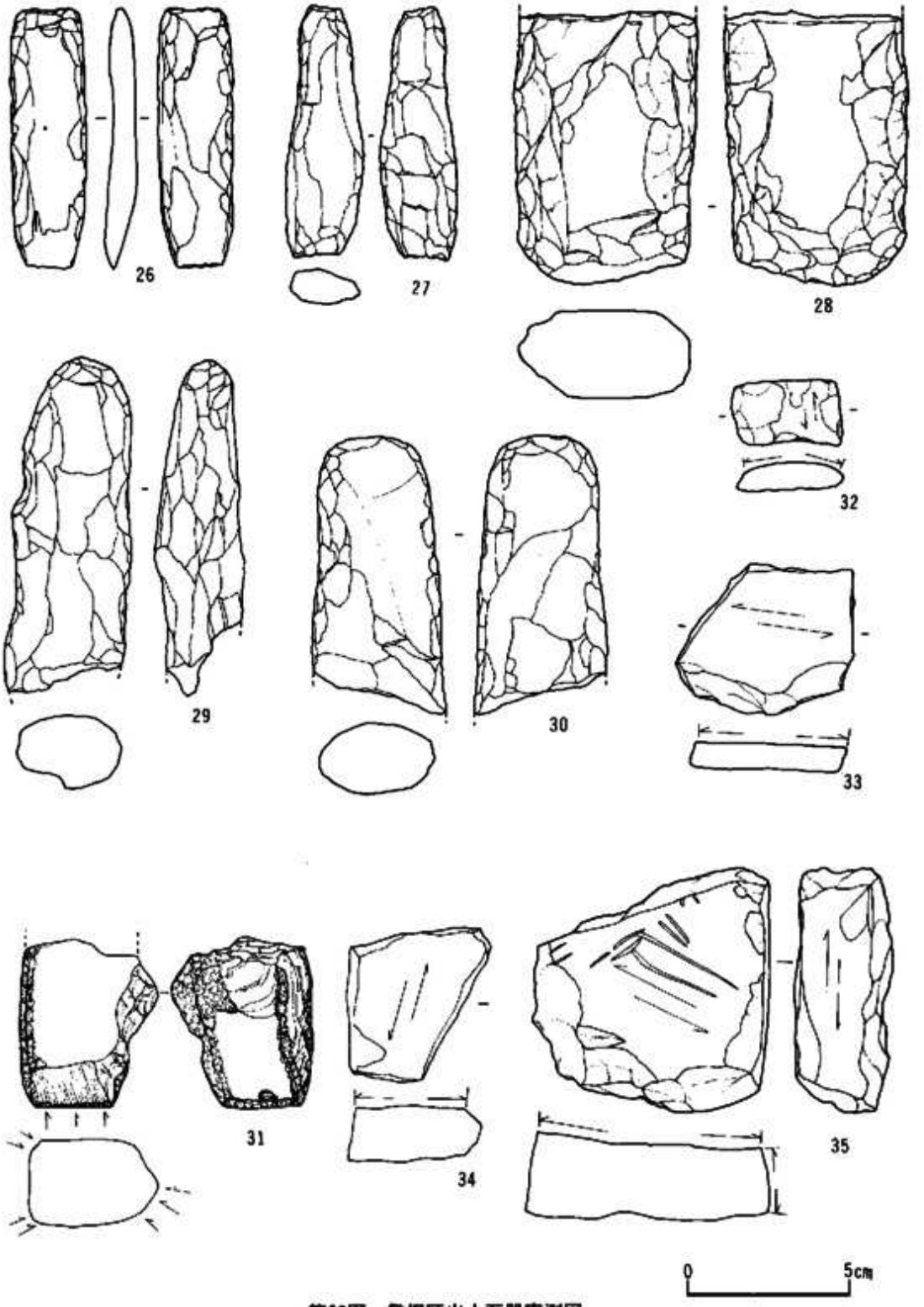
全例、単一的に得られた「トコロ6類土器」によって代表される土器群に伴出したものである。

石鏃（1）　かえし部の幅の広い、入念に両面加工が施され、刃部（尖頭部）が二等辺三角形状を呈する石鏃である。左右は対称形となり茎部が作り出されている。

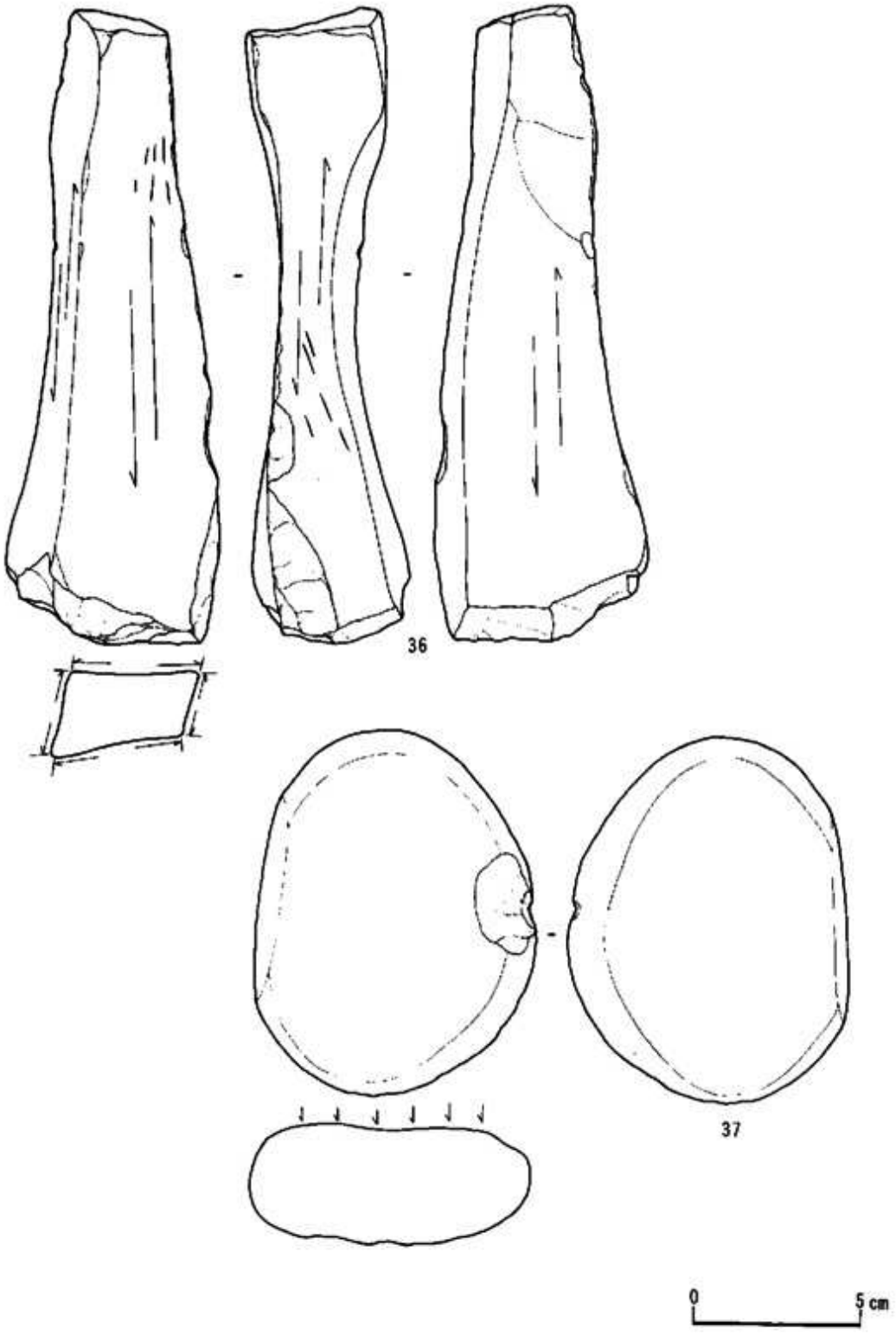
石銛先（2～5）　2は両面加工が入念に施されたもので銛先の尖頭部の破損品である。3は尖頭部を一部欠損しているもので、幅の狭いかえし部を有し、三角形状の長い柄部が作出されている。全体的な形状は柳葉形をなしたと推定される。4は、やや厚手の縦長剥片を素材に剥離加工を施こ



第28図　発掘区出土石器実測図



第29図　発掘区出土石器実測図



第30図　発掘区出土石器実測図

し、尖頭部と柄部をかろうじて作出してある、製作途中のものである。5は刃部（尖頭部）を大きく欠損しており、幅広で左右対称のかえし部と長く大きな舌状を呈する柄部が特徴とされる。

石錐（6）　頁岩製の剥片の尖った部分に細かな剥離加工を施し尖頭部としたものでエッヂ部分は、回転使用により磨滅し丸味を帯びている。

掻器（7、8）　やや厚手の剥片を素材に主剥離面より剥片のエッヂの全周にあるいは下端のエッヂに背の高い面をもつ様剥離加工の施されたものでエンドスクレパー（8）、ラウンドスクレパー（7）等と称されるものである。

削器（9～16）　剥片を素材に片面に剥離加工を加える（9、13）、左右両側縁のエッヂ部に剥離加工を行う（10～12）。剥片の一側縁のエッヂ部のみ加工が施され刃部とされるもの（14～16）等がある。いずれも素材となる剥片の形にとらわれず、剥片の形をそのまま生かしている。

石核（17、18）　17は、4面の剥片が剥がされた面を残す石核で、打面は原石面の平坦な面を利用し、打面調整等は行われていない。生産された剥片は、いずれも縦長剥片であろうと考えられる。

打面と剥離面の角度は、20°前後と比較的狭い。

18は、多種多様な剥片を剥いだ痕跡を有するもので、剥片を剥いだ面、原石面の平坦な面等を打面とし、様々な方向から剥片を生産している。いずれも打面と剥離面との角度は90°前後に保っている。

縦長剥片（19～25）　いずれの剥片も石核より連続的に剥がされた資料である。

22と24を除いたものはバルブ面を残しており打点の状態も観察される。これより見ると打面の調整等は、一切行われておらず、石核の形も一定ではない様相がうかがえる。しかしこれらの様にほぼ定形化された縦長剥片を意図的に大量生産する技法は、先土器時代での石刃技法より見劣はするもののそれからの伝統を受けた同種の技法によったものと推定される。

石斧（26～31）　26の狭長な刃部のみ研磨し刃部を作り出してあるものを除いて、他は全て製作途中に大きく破損し廃棄されたものである。

いずれも、短冊状を呈する様打撃を加え整形したものである。

31は、一部に研磨痕があるものの、整形時に破損廃棄された事は明らかであるが、角には、整形の為とは考えられない敲打痕が無数にある。石器製作等に用いられた敲き石、ハンマーとして転用されたのかもしれない。

砥石（32～36）　全例砂岩を利用し、研磨加工に用いられたものである。

32、33、34は、偏平な小型のもので一面にのみ擦面がある。35は、2面に擦面が残されている。36は、大型で柱状をなし、長軸方向に向けた擦面が4面ある。いずれも研磨する方向に直交する断面はくぼみ大きくコンケーブするものが大部分を示める。

石皿（37）　偏平楕円形状の河原石の平坦な一面に無数の細かな敲打痕、擦痕がみられるものである。

第6章　まとめ

本遺跡の発掘調査では、「トコロ6類土器」文化期の4軒の竪穴住居址が隣接して発見されている。これらの竪穴住居址のプラン・構造等は、先年調査されたS267・268遺跡に於いて発見された同時期の2軒の竪穴住居址に類似している（羽賀・内山1977）。

遺物の出土状況等も基本的には一致しており、その廃棄のパターンもおそらくは類似したものであったろうと考えられる。

4軒の竪穴住居址が隣接して発見されたのだが、その相互の関係は調査時においては住居址の覆土層の薄さより把握できなかった。

S267・268遺跡で発見された2軒の竪穴住居址については、出土した遺物の廃棄の状況、石器類の組成の差よりある程度までその関係を探ったが、明確な結果が得られてはいない。

本遺跡に於いて発見された4軒の竪穴住居址より得られた遺物の量は少なく、特に石器類に関しては、4軒の竪穴住居址より得られた総数に於いても、S267・268遺跡の個々の竪穴住居址の出土数に及ばず、石器組成の差による竪穴住居址間の相互関係の把握にまで至ってはいない。

しかし、4軒発見された竪穴住居址内より発見された遺物中、土器・石器類は少ないが黒曜石を主とした剥片類の中には、剥離面どうしが接合するもの、接合する剥片に石鏃等の未成品が認められるものが存在する事等石器作りが個々の住居址内にて行われていたかの様な事実がいくつか明らかにされている。

また竪穴住居址群に隣接して、細かなチップ状の剥片が浅くレンズ状に堆積し多数発見される剥片の廃棄所と考えられる部分が存在している。

これらの諸事実は、竪穴住居址を一単位とした人間集団が、個々に自給自足的に石器類を製作していた可能性が指摘される。

各竪穴住居址内に残された石器類及び黒曜石を主とした剥片（チップを含む）類の数字は、第1表に示めした。

第1号竪穴住居址では、石器類5点に対し剥片が50余点、第2号竪穴住居址に於いては、石器類14点に対して剥片が80余点、第3号竪穴住居址では石器類20点に対し剥片 100点弱と多く、第4号竪穴住居址では石器類7点に対し剥片50余点と、磨製のもの、石皿・敲石・砥石等を含んだ石器類の数と黒曜石を主とした剥片の数量は、1：6前後になる。黒曜石製の打製石器と、黒曜石の剥片類（チップを含む）との比率は、1：11前後の比率になり、その比率の差はより少なくなる傾向がある。

また石層の廃棄所と思われる部分にて得られた剥片類、チップの数は、剥片（縦長状を呈するもの、幅広を呈すもの）の数に比して1cm以下の魚のウロコ状を呈する剥片（チップ）が圧倒的に多く、石器（打製）製作の際に排出されるチップの廃棄されたものと解されよう。

これらの諸事実より考えるならば、各竪穴住居址に於いて一連の石器作りが行われ、素材として

第1表　S 255 遺跡竪穴住居址石器組成

器種＼竪穴住居址	第1号竪穴住居址	第2号竪穴住居址	第3号竪穴住居址	第4号竪穴住居址	合　計
石　鏃			2	1	3
石　錐　先	1	3	3		7
石　錐		1		1	2
掻　器		1			1
削　器	3（1）	4（1）	3（1）	2（1）	12（4）
石　斧		1（1）	4	1	6
砥　石		1（1）	3		4（1）
敲　石		1	1（1）		2（1）
石　皿			1	1	2
石　核			1		1
縦長剥片	5（5）	6（8）	7（14）	6（10）	25（37）
幅広剥片	（27）	2（31）	（32）	（15）	2（105）
チップ	（12）	（14）	（19）	（10）	（55）
石　塊（黒曜石）	（1）	（1）	（4）	（5）	（11）
石斧の破片	（2）	（13）	（1）		（16）
合　計	9（48）	18（69）	25（72）	10（41）	

（　）の数字は、図示しなかったもの

使用にたえうると判断された剥片を主に竪穴住居址内に残し、大きさが1cm以下のチップ類など使用にたえぬ物を主に竪穴住居址外の他所の一定地区（部分）に廃棄したものと推定される。

さて4軒の竪穴住居址からは、第1表にあるごとく、縦長形状を呈する全長3cm前後・全幅1～1.5cmの石刃様剥片が比較的多く得られている。また数は少ないが第3号竪穴住居址からは、これらの石刃様を呈する縦長剥片を剥離生産したと考えられる石核が出土しており、発掘区よりも同種の物が数点得られている。

「トコロ6類土器」を主とする「北筒土器文化」には、先土器時代に盛行した石刃技法に類する同種の技法による縦長形状の粗雑な石刃様剥片が多量に出土する事は古くより知られており（加藤1960、大井1965）、その技法がはたして先土器時代に盛行したそれと同種のものかどうか考えた例もある（羽賀1974）。

特にT77遺跡に於いては、多量の剥片が発見され、それらの分類的作業より縦長形状を呈する石刃様剥片の石核より剥離生産されて行く過程を再現したのであるが、得られた剥片の全例が約1,000m²におよぶ地域に散乱していたもので数量も数万点と接合資料を得る等細かな作業は不可能であった（羽賀1974）。

しかし本遺跡にて発見された4軒の竪穴住居址内より得られた黒曜石を主とする剥片類は、小単位にまとまりを有し、その剥離生産される過程を知る上には非常に良好な資料であった。さらに、

第２号竪穴住居址では、幅広の２枚の剥片が接合し、第３号竪穴住居址では、７枚の縦長剥片が３組に接合、第４号竪穴住居址では、４枚の縦長剥片が接合されており、剥片が石核より連続的に剥離される過程がより明確になったといえよう。

Ｔ77遺跡に於いて得られた多量の剥片類は、個々の剥片に残された各種の剥離面の分類より、先土器時代に盛行した石刃技法と同種の技法による剥片の大量生産が行われていたと考えた。しかし、縦長形状の剥片を素材とし作られた石器類は、剥片の素材をそのままにエッヂ部にわずかな剥離加工を施こす削器程度しか無く、他の石器類はこれを素材とせず、石刃を石器製作の素材の中心とした石刃石器群とはいえないと結論された（羽賀1974）。

これらの事実は、大井晴男氏によってすでに指摘されている事であり（大井1965）、最近では、「トコロ５類土器」が得られている。紋別市オンネナイ第２地点遺跡に於いて得られた石器群についても同様の指摘がなされている（佐藤1977）。

本遺跡に於いての石器群についても同様の事がいえるが、第３号竪穴住居址に於いては、接合する縦長剥片の中に石鏃の未成品かと考えられる茎部のみ作り出された剥片が存在している。この資料より考えるならば、石鏃のような比較的小型の石器にも、縦長剥片を素材として使用したものと考えられよう。

石核より連続的に剥離された縦長剥片は、全長３cm内外、幅１cm内外と小型であり、石核も同様に小型である事が知られている。この小型である理由について、佐藤は、「石核の有効利用の為、意識的に小型の粗製石刃を作り出すため、原石入手がむずかしい」等の諸条件を考えている（佐藤1977）。

しかし、オンネナイ第２遺跡、朝日トコロ貝塚、札幌Ｔ77遺跡、Ｓ267・268遺跡より出土している縦長形状の剥片及び石核を見ると、先土器時代に盛行した石刃技法に比較すると技術的にかなり粗雑になっている点が目に付く。たとえば、本遺跡第４号竪穴住居址にて得られた接合する４片の縦長剥片をみると、打面は原石面であり、打面と剥離面の角度も、原石（素材）の剥離するのに都合の良いと思われる部分のみ使用して剥離面を決定しているようである。打点の大きさ、位置も一定ではなく、鹿角製のハンマー等で連続的に打撃を加え剥片を剥離するといったややラフな方法がとられていたものと考えられる。

打面、剥離面、打角等の調整が行われた様子もなく、特に細石刃技法にみられるような細心さはみられない。

このように技術的に衰退している為に小型の縦長剥片しか生産できなかったものと考えたい。

特に縦長剥片を素材とする石器類は、「北筒土器文化」に伴う石器群中のごく一部にしかすぎず他の大部分の石器群はそれを素材としていない事に留意すべきであろう。

結　語

本遺跡の発掘調査によって得られた諸事実については、各章、各節にわけ述べてきたとうりである。

本遺跡からの出土遺物は、縄文時代中期に属するいわゆる「北筒土器」によって代表される「トコロ6類土器」が単一的に得られ、さらに各種の石器類が多数得られている。

またこの時期の遺構として、4軒の竪穴住居址が隣接して発見され、さらに陥穴と考えられているTピットが2基、用途不明のピットが1個、チップが多量に発見された石屑の廃棄所と考えられる部分一ケ所が検出されている。

「北筒土器」文化における竪穴住居址、集落構成等の様相は、竪穴住居址の発見例も少なく、不明の点が多かったのであるが、最近札幌市域を中心としてその発見・報告例が増加している。

従来、竪穴住居址のプランは多角形、もしくは五角形を基本としたものとされて来たが、先年札幌S267・268遺跡にて発見された2軒の竪穴住居址、さらに今回発見された4軒の竪穴住居址は、五角形よりは楕円形となる傾向にあり、その構造についても、床面中央部に炉址と思われる焼土の集積がほぼ例外なく認められるものの、柱穴があるもの、柱穴を欠くものと種々の構造の差位が新たな問題として出現しつつある。

また竪穴住居址内から出土した遺物の総数は少ないが、接合する縦長剥片が数点得られ、従来よりその存在を指摘されていた「北筒土器」文化に存在する粗製の石核より長さ3cm内外の縦長剥片を連続的に剥離生産する先土器時代に盛行した石刃技法と同種の技術の一端が明らかにされた。

さらに、竪穴住居址群に隣接してチップの類が密集して出土する場所があり、石器製作の際に排出される剥片類の廃棄所であろうと考えた。

これらの事実は、「北筒土器」文化における石器群の製作・使用・廃棄のシステムを研究する上において良好な資料となるであろう。

他に従来より陥穴であろうと考えられている深い溝状を呈するTピットが2基、10m前後の間隔を置き並列して発見されている。

4軒の竪穴住居址群と陥穴の構築・使用時が明確に同時とはいえないが、狩猟場と居住地が分離していなかった可能性がうかびあがってくる。

札幌市当局による厚別副都心計画とそれに関連する民間の宅地造成事業の実施に伴い、本遺跡周辺の丘陵地帯の遺跡群は、多くの事前調査が行われており、その各々の概要は全て公表されている。これらより特に注目すべきは、各遺跡とも「北筒土器」がなんらかの形で出土する遺跡が数多くみられる事である。

縄文時代中期に於ける「北筒土器」文化のにない手であった人々の活動圏の広大さ、バイタリティを有する生活力は、他時期にはみられない躍動感がある。

こういった事実は、狩猟・漁猟・採集といった一連の生産活動の背景である豊富な自然資源とい

う裏付けがあったであろうし、大いなる生産活動をささえた、かなり高度な社会体系がこの時期に確立していた事が考えられる。

本道に於いては、後の続縄文時代に至るまで、特に石器群中には根強い北方的伝統を有するといわれている。「北筒土器」文化は、こうした伝統の基礎となった文化ではなかろうかと推察されるのである。

上記の意味において、本遺跡は「北筒土器」文化の単純遺跡であり、集落ともいえる4軒の竪穴住居址が発見され、我々が現在まで漠然と考えていた「北筒土器」文化の概要が、具体的な形で想定できる手懸を得たという意において、大きな成果があったといえよう。

引用参考文献

上野秀一他　1975「S238 遺跡・S239 遺跡」『札幌市文化財調査報告書』IX

上野秀一他　1975「S256 遺跡・S257 遺跡・S253 遺跡」『札幌市文化財調査報告書』XI

大井晴男　1965「日本の石刃石器群 "Blade Industry" について」『物質文化』5所収

加藤　正　1960「北筒式土器文化に含む特殊な要素」『先史時代』10所収

河野・宇田川・岩崎・西野　1963「札幌市附近の遺跡　収録篇・分布図篇」『郷土の科学』41、42所収

佐藤和利他　1977『紋別市オンネナイ第2地点遺跡』

野村　崇　1978「野幌丘陵における先史遺跡の諸問題」『北海道開拓記念館調査報告』15所収

羽賀憲二　1974「T77遺跡」『札幌市文化財調査報告書』III

羽賀憲二・内山真澄　1977「S267・268遺跡」『札幌市文化財調査報告書』XIV

第2表　S 255 遺跡遺構一覧表

遺構名	発掘区	平面形	規模			長軸方向	備考
			開口部(m)	壁底部(m)	深さ(m)		
第1号竪穴住居址	A－V、B－V	隅丸五角形	4.65×3.8		0.15	北東－南西	
第2号竪穴住居址	A－Ⅳ、B－Ⅳ	楕円形	5.7 ×4.3		0.35	北々東－南々西	
第3号竪穴住居址	A－V、A－Ⅳ	楕円形	4.5 ×3.5		0.2	北東－南西	柱穴有
第4号竪穴住居址	A－Ⅳ	楕円形	5.5 ×4.5		0.3	北々東－南々西	柱穴有、貼り床
第1号Tピット	C－Ⅳ	楕円形	1.58×1.1		1.45	南－北	小ピット有
第2号Tピット	B－V	楕円形	1.52×1.15	0.96×0.36	1.3	南－北	小ピット有
第1号ピット	B－V	長楕円形	1.6 ×0.8	0.8 ×0.25	0.15	北西－南東	第2号Tピットと切り合う

第3表　S 255 遺跡出土石器一覧表

挿図番号	出土地区	器種	全長(mm)	全幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
6－1	第1号竪穴住居址	錐先	48	24	9	7.8	Obs.	
2	〃	削器	30	32	9	7.4	〃	石核の残部？
3	〃	〃	39	38	14	17.2	〃	
4	〃	〃	65	25	7	7.9	〃	
5	〃	縦長剥片	43	14	5	2.6	〃	
6	〃	〃	37	16	3	1.5	〃	
7	〃	〃	39	22	3	1.8	〃	
8	〃	〃	35	14	3	1.6	〃	
9	〃	〃	34	12	7	2.1	〃	
9－1	第2号竪穴住居址	錐先	43	19	6	3.9	〃	
2	〃	〃	(30)	19	4	(2.1)	〃	破損品
3	〃	〃	61	37	8	13.5	〃	裏面加工なし
4	〃	石錐	35	12	6	3.1	BIS.	
5	〃	掻器	50	18	8	6.3	Obs.	
6	〃	削器	45	40	8	10.4	〃	
7	〃	〃	53	34	10	12.5	〃	
8	〃	〃	40	16	7	3.2	〃	
9	〃	〃	46	21	8	4.8	〃	
10	〃	縦長剥片	42	19	5	4	〃	
11	〃	〃	32	8	3	0.9	〃	
12	〃	〃	49	23	8	4.9	〃	
13	〃	〃	30	16	3	1.4	〃	
14	〃	〃	28	14	4	1.2	〃	
15	〃	〃	27	13	4	1.1	〃	
16	〃	接合剥片	34	48	6	5.1	〃	幅広剥片
17	〃	〃	28	32	2	1.5	〃	〃
18	〃	〃	34	37	4	3.6	〃	〃
19	〃	石斧	98	31	15	52.9	GreS.	未成品
20	〃	砥石	51	34	13	34.8	Sa.	
21	〃	敲き石	77	49	28	159.0	〃	
14－1	第3号竪穴住居址	石鏃	24	10	3	0.5	Obs.	
2	〃	〃	23	10	3	0.7	〃	
3	〃	錐先	(52)	30	8	(8.5)	〃	破損品
4	〃	〃	75	30	8	12.3	〃	
5	〃	〃	65	29	4	9.1	GreS.	磨製錐先
6	〃	削器	42	19	9	7.1	Obs.	
7	〃	〃	(22)	34	3	(2.4)	〃	
8	〃	〃	40	24	6	7.4	〃	
9	〃	石核	43	40	12	18.2	〃	
10	〃	接合剥片	42	35	12	14.2	〃	

挿図番号	出土地区	器種	全長(mm)	全幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
14—11	第3号竪穴住居址	接合剥片	42	30	10	8.3	Obs.	
12	〃		42	38	15	22.5	〃	
13	〃		44	32	6	4.1	〃	
14	〃	接合剥片	41	17	4	2.6	〃	石鏃未成品
15	〃		33	20	6	1.5	〃	
16	〃		47	28	7	6.7	〃	
17	〃		43	18	7	2.9	〃	
18	〃	接合剥片	42	18	5	3.8	〃	
19	〃		40	16	4	2.3	〃	
20	〃		42	18	4	1.5	〃	
21	〃	石斧	106	39	17	118.8	BlS.	
22	〃	〃	96	35	11	52.0	〃	
15—23	〃	〃	(82)	36	12	60.9	GreS.	刃部欠損
24	〃	〃	75	30	13	48.8	BlS.	未成品
25	〃	砥石	66	35	22	75.5	Sa.	
26	〃	〃	93	61	37	225.0	〃	
27	〃	〃	56	35	24	74.5	〃	
28	〃	敲石	124	22	17	58.5	GreS.	
29	〃	石皿	117	139	50	1125.0	An.	
18—1	第4号竪穴住居址	石鏃	42	15	5	2.6	Obs.	
2	〃	石錐	43	11	9	2.8	Hs.	
3	〃	削器	72	37	18	40.6	Obs.	石核？
4	〃	〃	37	19	5	3.5	〃	
5	〃	剥片	50	22	11	6.3	〃	
6	〃	〃	41	26	5	4.6	〃	
7	〃	石斧	83	32	11	41.9	Gres.	
8	〃		41	23	11	7.1	Obs.	
9	〃		41	23	7	5.3	〃	
10	〃		39	15	5	2.9	〃	
11	〃	接合剥片	40	12	4	1.7	〃	縦長剥片
12	〃		40	12	6	1.8	〃	
13	〃		39	13	5	2.4	〃	
14	〃		33	11	4	1.2	〃	
19—15	〃	石皿	240	259	108	9125.0	An.	
23—1	第1号ピット	銛先	42	22	5	2.6	Obs.	
2	〃	掻器	38	26	7	6.7	〃	
3	〃	〃	40	20	9	6.5	〃	
4	〃	削器	48	18	8	4.4	〃	
5	〃	縦長剥片	39	20	8	4.2	〃	
6	〃	〃	33	15	4	1.3	〃	

挿図番号	出土地区	器種	全長(mm)	全幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
23－7	第1号ピット	縦長剥片	28	22	5	3.1	Obs.	
8	〃	石斧	(75)	38	8	(28.8)	BIS.	破損品
9	〃	〃	(74)	42	25	(127.3)	〃	〃
10	〃	砥石	104	47	37	210.9	Sa.	
11	〃	〃	110	105	63	940.0	〃	
25－1	石屑廃棄所	ナイフ状石器	48	32	11	13.9	Obs.	
2	〃	〃	(24)	(26)	(7)	(2.2)	〃	破損品
3	〃	石核	40	33	153	19.5	〃	
4	〃	削器	36	16	5	2.0	〃	
5	〃	剥片	19	24	3	0.8	〃	チップ
6	〃	〃	23	14	2	0.4	〃	〃
7	〃	〃	23	11	2	0.4	〃	〃
8	〃	〃	15	18	3	0.6	〃	〃
9	〃	剥片	21	12	2	0.3	〃	〃
10	〃	〃	22	30	2	1.2	〃	〃
11	〃	〃	18	18	2	0.5	〃	〃
12	〃	〃	15	19	2	0.5	〃	〃
13	〃	〃	17	15	3	0.4	〃	〃
14	〃	〃	18	16	1	0.3	〃	〃
15	〃	〃	31	15	3	0.7	〃	〃
16	〃	敲き石	53	59	51	275.0	GreS.	球状
17	〃	〃	64	51	18	70.7	〃	石斧の未成破損品？
28－1	表採	石鏃	22	16	3	0.7	Obs.	
2	D－Ⅳ	錐先	(22)	(15)	(5)	(1.4)	Hs.	破損品
3	A－Ⅵ	〃	(45)	(17)	5	(3.3)	Obs.	〃
4	C－Ⅳ	〃	40	22	6	5.2	〃	錐先未成品？
5	D－Ⅴ	〃	(40)	(33)	7	(7.3)	〃	尖頭部欠損
6	表採	石錐	30	17	4	2.3	Hs.	
7	〃	掻器	26	28	9	2.6	Obs.	
8	〃	〃	52	42	15	32.3	〃	
9	C－Ⅴ	削器	64	34	10	21.3	〃	
10	D－Ⅳ	〃	61	22	15	14.6	Hs.	
11	B－Ⅴ	〃	29	20	5	3.9	Obs.	
12	D－Ⅴ	〃	54	28	8	10.8	Hs.	
13	表採	〃	39	21	10	7.2	Obs	
14	D－Ⅳ	〃	35	34	6	5.5	〃	
15	C－Ⅳ	〃	54	23	11	13.5	〃	
16	C－Ⅴ	〃	59	42	12	18.0	〃	
17	C－Ⅴ	石核	36	35	13	18.7	〃	
18	C－Ⅴ	〃	27	38	20	23.3	〃	

挿図番号	出土地区	器種	全長(mm)	全幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
28−19	C − Ⅳ	縦長剝片	42	19	5	2.7	Obs.	
20	C − Ⅳ	〃	47	14	6	2.9	〃	
21	C − Ⅳ	〃	33	12	2	0.8	〃	
22	C − Ⅴ	〃	45	20	5	2.4	〃	
23	C − Ⅴ	〃	24	14	4	1.0	〃	
24	D − Ⅵ	〃	44	11	4	1.6	〃	
25	D − Ⅴ	〃	30	21	3	1.7	〃	
29−26	D − Ⅳ	石斧	80	23	8	27.9	BlS.	
27	〃	〃	77	24	12	27.8	〃	未成品
28	C − Ⅳ	〃	(83)	(55)	(28)	(240.0)	GreS.	未成破損品
29	D − Ⅳ	〃	(102)	36	26	(132.1)	BlS.	〃
30	表採	〃	(84)	(39)	24	(133.1)	〃	〃
31	B − Ⅴ	〃	(52)	42	32	(112.6)	GreS.	敲き石に転用？
32	C − Ⅴ	砥石	20	33	8	7.8	Sa.	
33	C − Ⅲ	〃	46	54	8	30.1	〃	
34	C − Ⅳ	〃	51	43	17	39.1	〃	
35	C − Ⅱ	〃	75	72	28	185.2	〃	
30−36	D − Ⅳ	〃	189	63	48	450.0	〃	
37	C − Ⅳ	石皿	109	83	37	500.0	An.	

石質略号

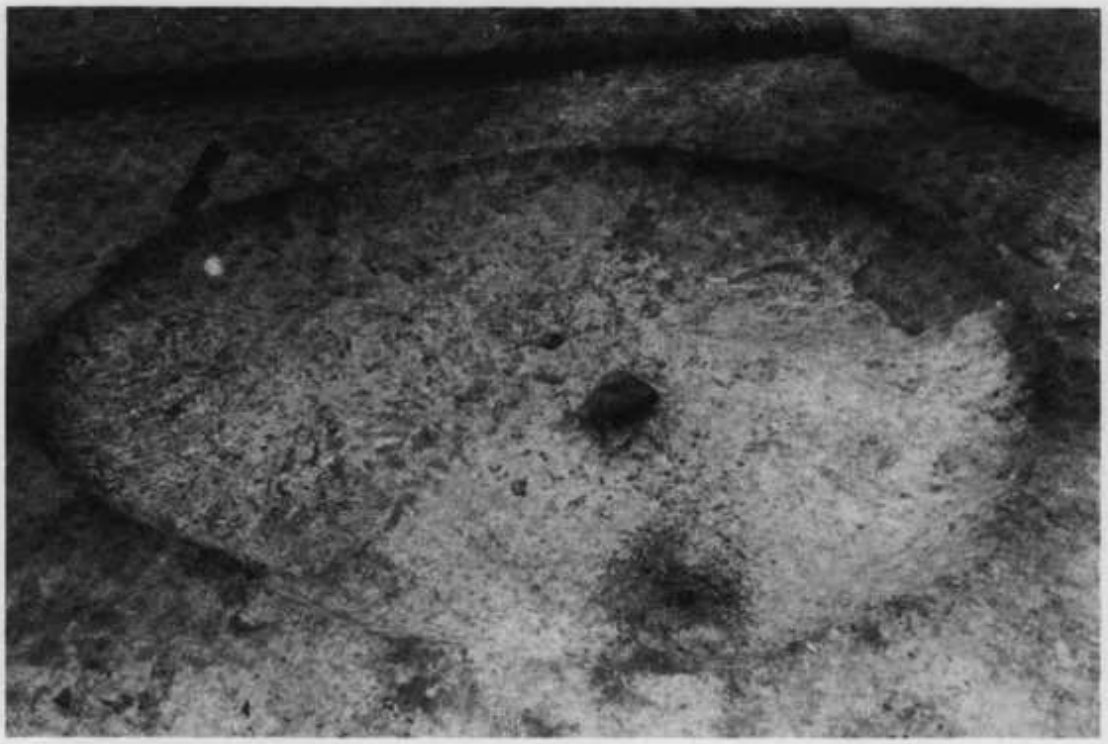
An. (Ande Site) ：安山岩
BlS. (Black Schist)：黒色片岩
GreS. (Green Schist)：緑色片岩
Hs. (Hard Shale) ：硬質頁岩
Obs. (Obsidian) ：黒曜石
Sa. (Sand Stone) ：砂岩

図　　版

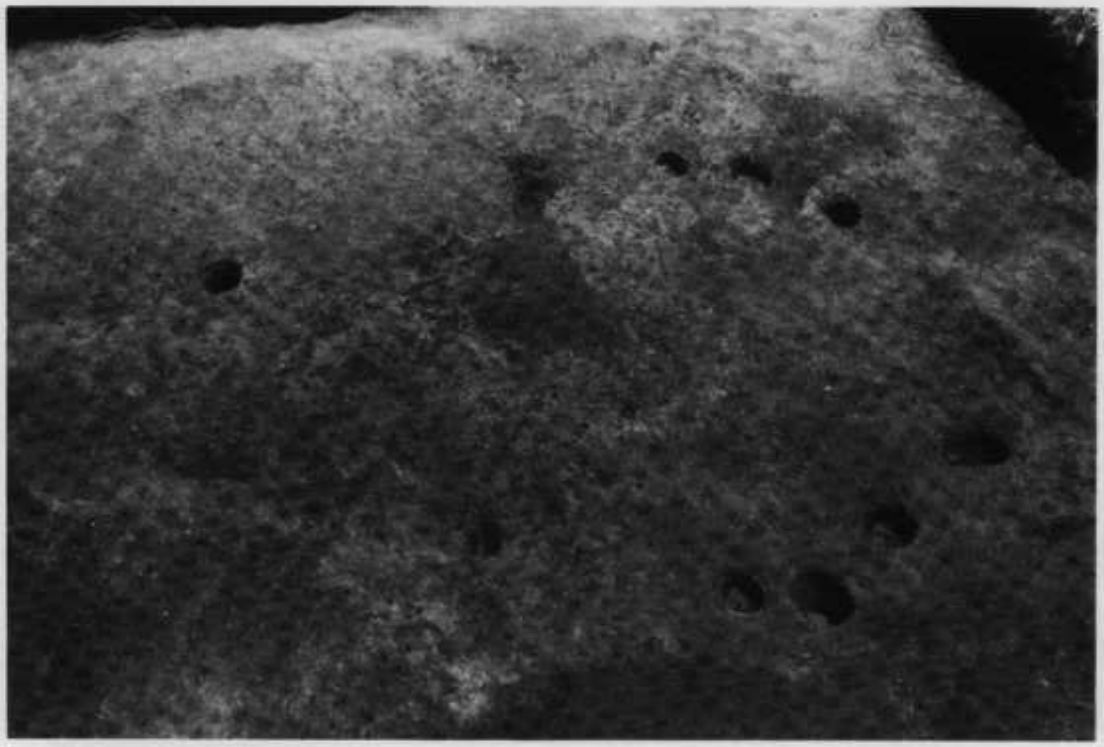
図版1

A　遺跡遠景

B　発掘区



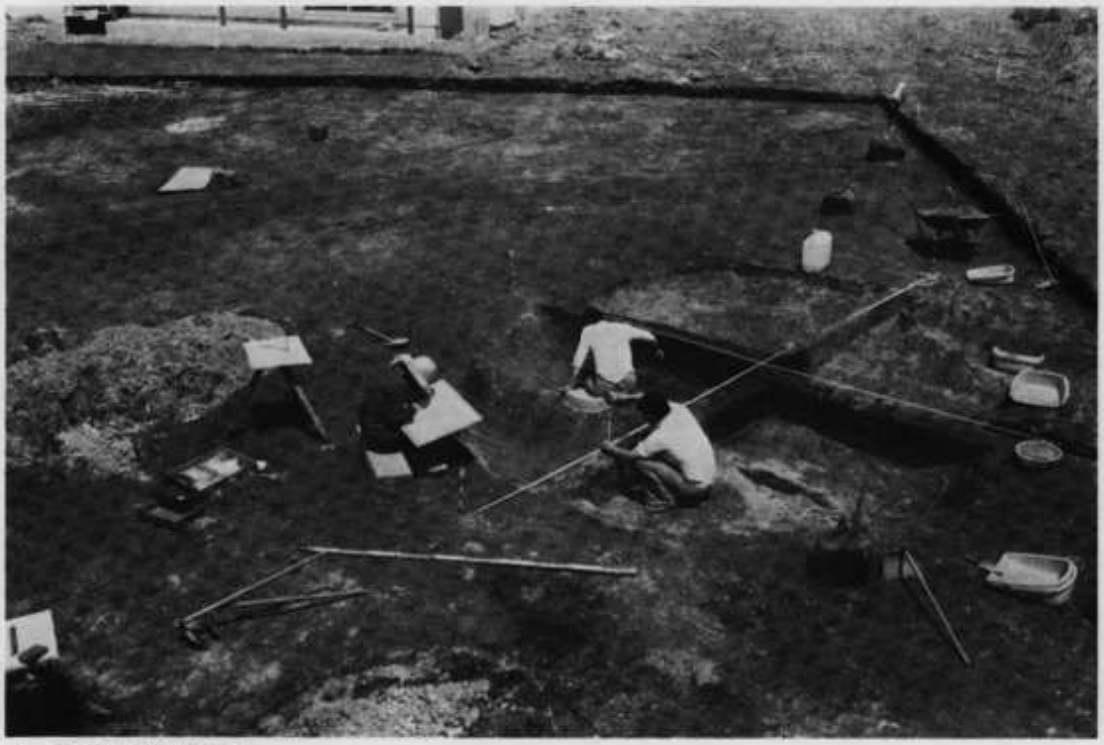
A　第2号竪穴住居址（西より）



B　第3号竪穴住居址（西より）

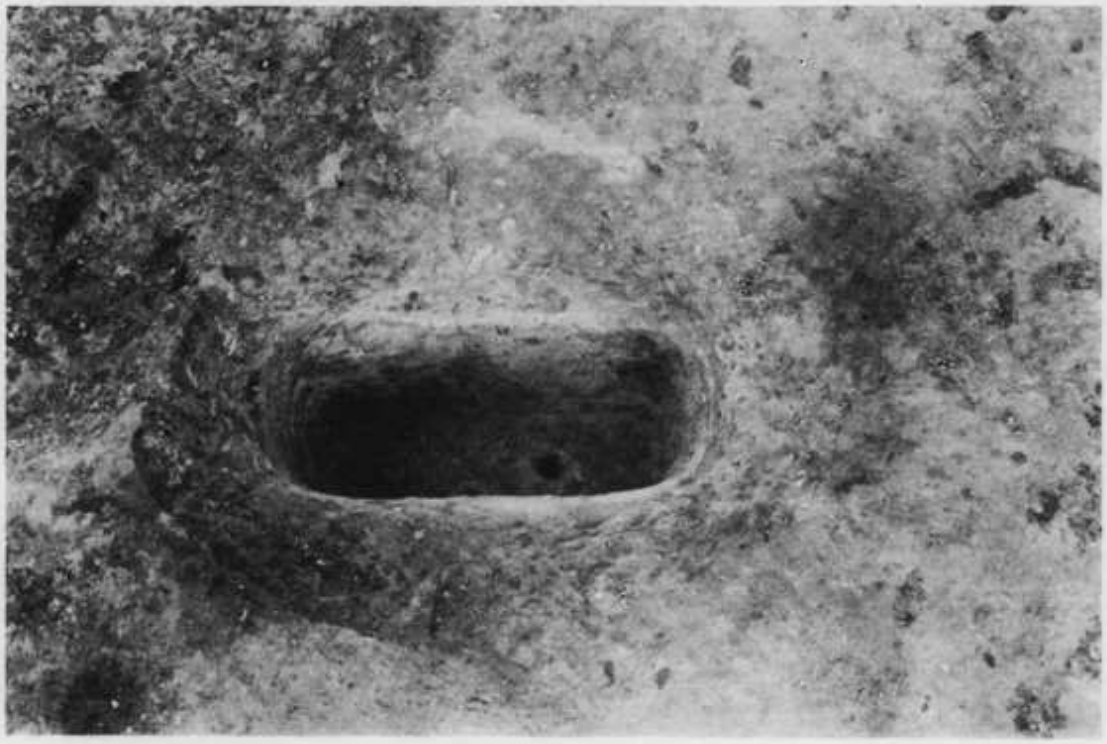
A　第4号竪穴住居址（西より）

B　第3号竪穴住居址出土土器



A　竪穴住居址発掘風景

B　竪穴住居址発掘風景

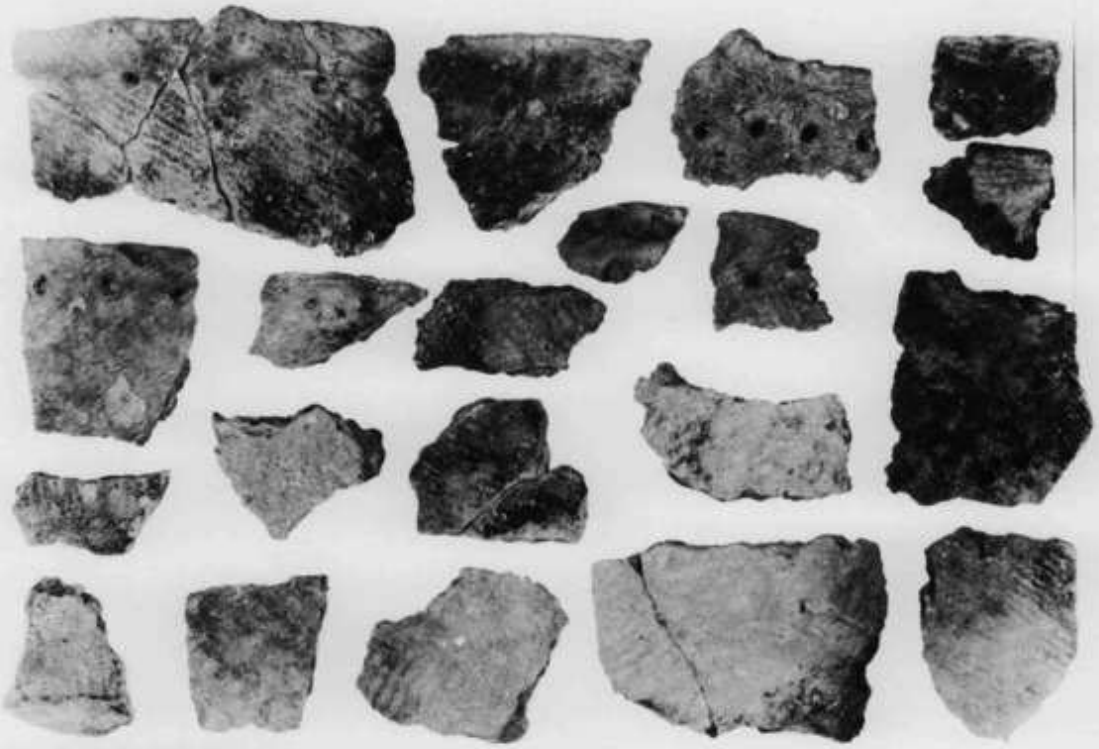


A　第1号Tピット（西より）

B　第2号Tピット（西より）

復元土器（1 第3号竪穴住居址 2 第1号ピット）

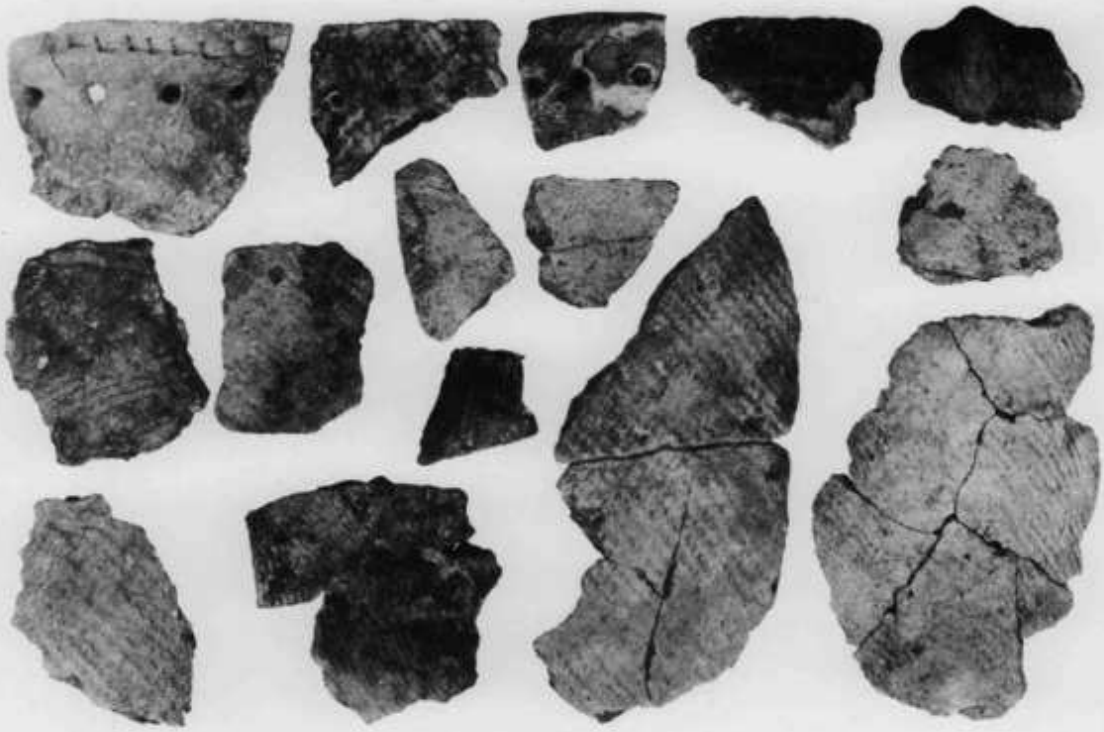
A　第1号竪穴住居址出土土器



B　第2号竪穴住居址出土土器

A　第3号竪穴住居址出土土器

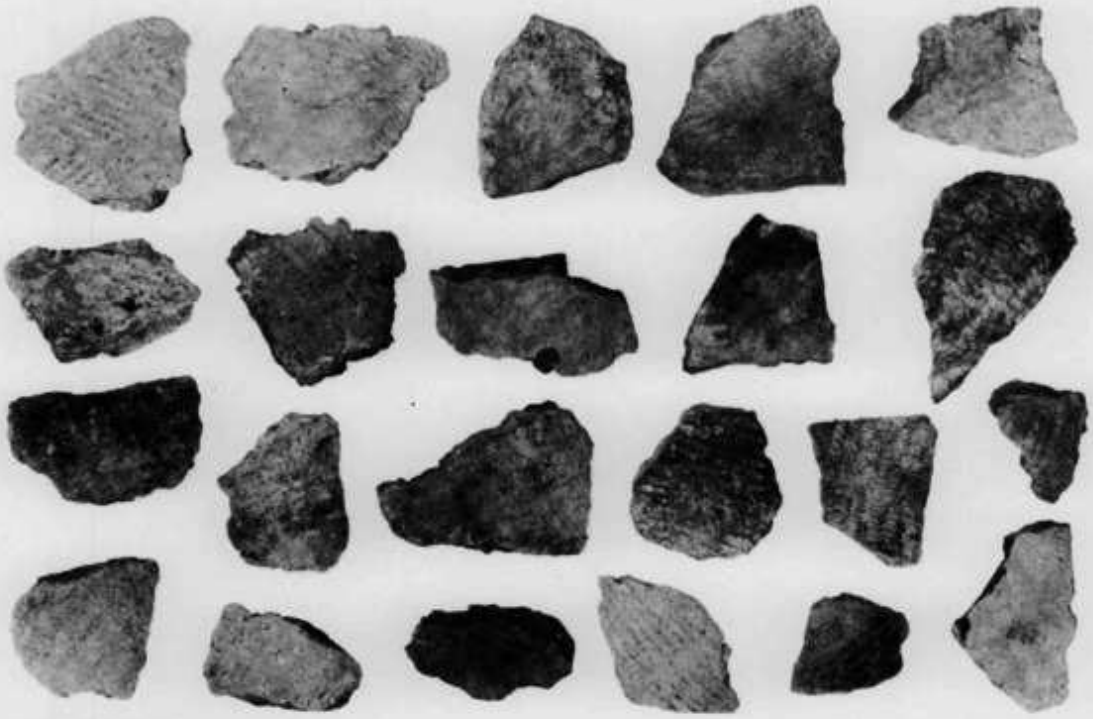
B　第4号竪穴住居址出土土器



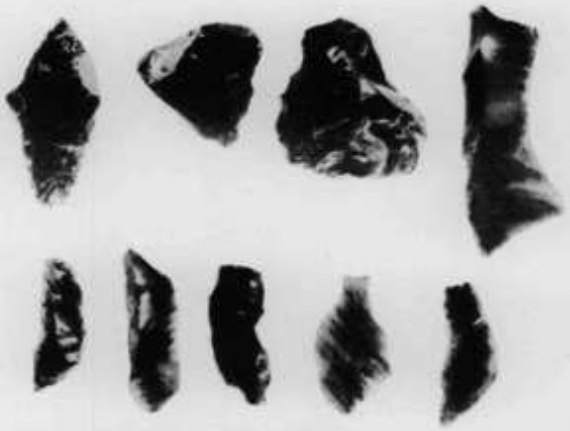
A　第1号ピット出土土器

B　石屑廃棄所出土土器（右端第2号Tピット）

A　発掘区出土土器



B　発掘区出土土器



A　第1号竪穴住居址出土石器

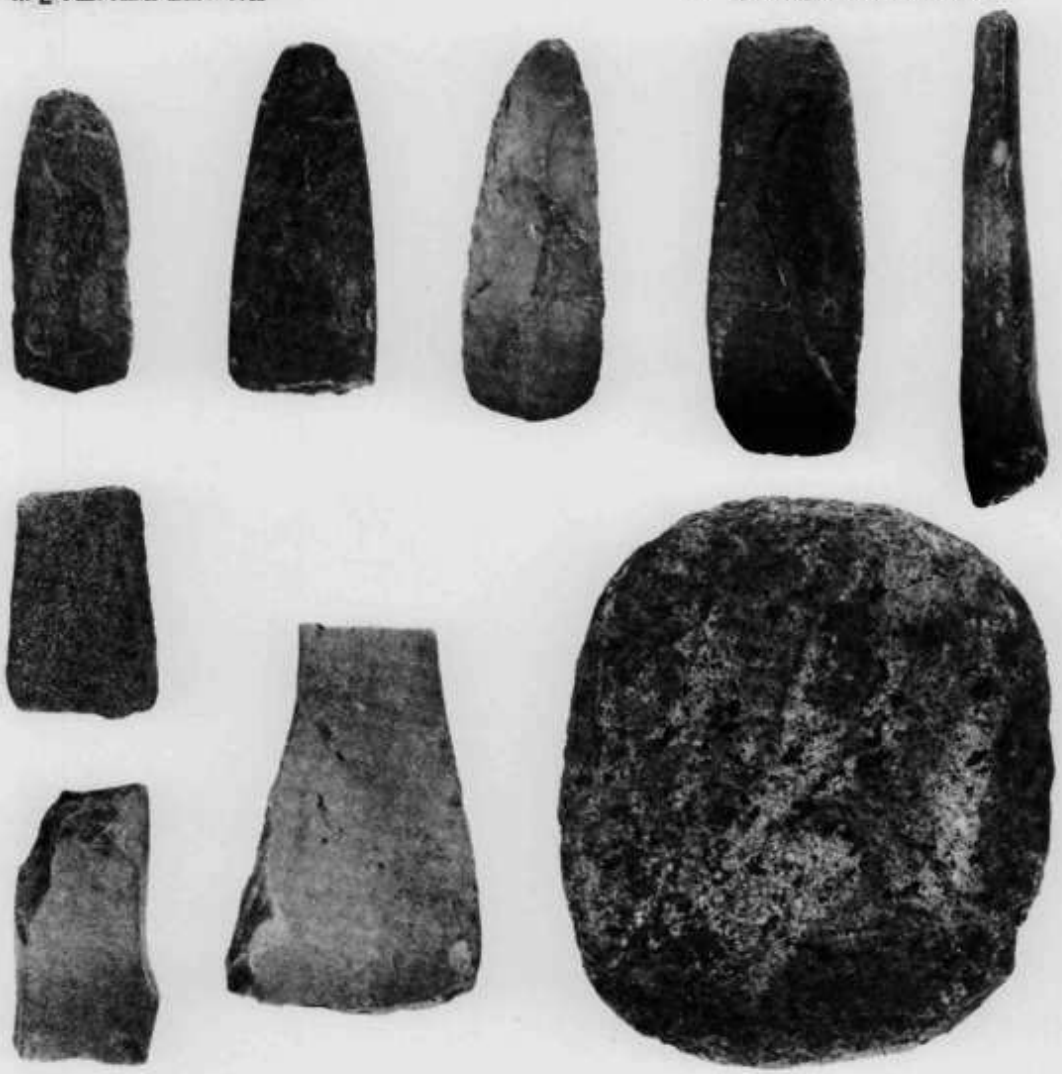
B　第4号竪穴住居址出土石器

C　第2号竪穴住居址出土石器

D　第3号竪穴住居址出土石器

A　第2号竪穴住居址出土石器

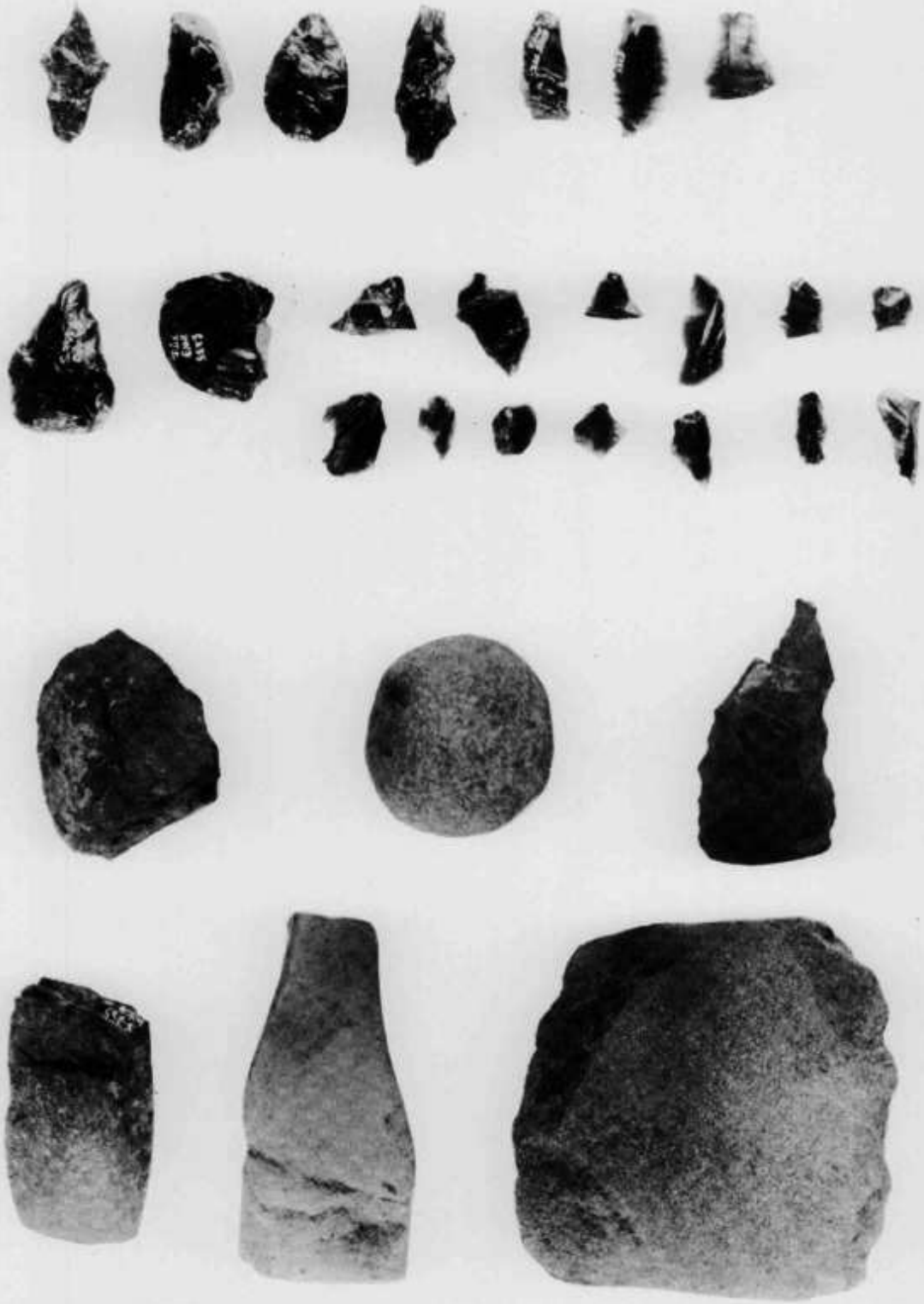
B　第4号竪穴住居址出土石器



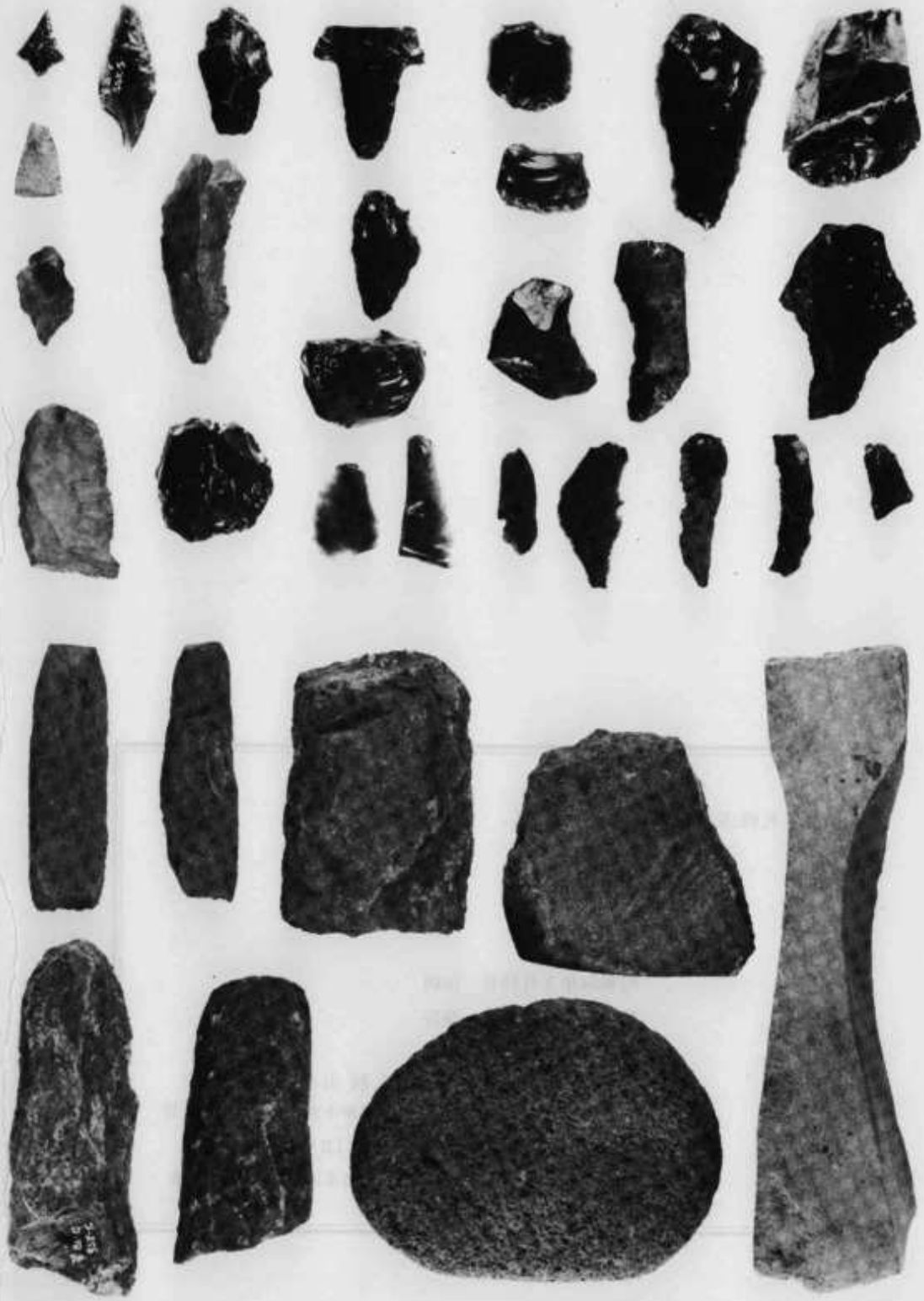
C　第3号竪穴住居址出土石器

A　竪穴住居址出土接合剥片

B　第4号竪穴住居址出土石器



第1号ピット　石屑廃棄所出土石器



発掘区出土石器

札幌市文化財調査報告書 XIX

S 255遺跡

昭和54年 3 月15日　印刷
昭和54年 3 月20日　発行

発行者　札幌市教育委員会
札幌市中央区北 1 条西 2 丁目
印刷所　中西印刷株式会社
札幌市東区東苗穂町505番地